

Alternative Systems Study Bulletin

メール版 第26巻第1号 (2018年6月5日)

18回目のメール版を送ります。

ルネサンス研究所などの複数のメーリングリストに投稿しますので、これまで手に取っておられなかった方々にも届くことになります。配信停止の手続きは、メールで連絡して下さればいいのですが、メーリングリストのばあいは配信停止ができません。お手数ですが届いたら削除して下さい。

この小冊子は、1993年から発行しています。最初は知的創造集団のネットワーク形成をめざし、数人の同人で始めました。しかし、私が阪神大震災以降多忙になったこともあり、第4巻(1996年)からは私の個人誌として再出発しています。そのころは協同組合のシンクタンクづくりをめざしていました。シンクタンクづくりは実現していませんが、以降隔月刊で発行し、主要な論文はHPに掲載しています。

メール版で発行したバックナンバーは、PDFファイルにしてHPの「バラキン雑記」のところに掲載しています。ぜひご覧ください。

2015年度の『ASSB』のPDFファイル。

http://www.office-ebara.org/modules/weblog/details.php?blog_id=239

2016年度の方は次です。

http://www.office-ebara.org/modules/weblog/details.php?blog_id=240

2017年度の方は次です。

http://www.office-ebara.org/modules/weblog/details.php?blog_id=244

メール版は拡散自由です。またいろいろな意見や異論があれば、メールでお知らせください

編集 境 毅(筆名:榎原 均)

連絡先 〒600-8691 京都市下京区東塩小路町 京都中郵私書箱 169号 貿易研究会

ホームページ <http://www.office-ebara.org/>

メール sakatake2000@yahoo.co.jp

購読料 無料 (カンパ歓迎)

カンパ振込先(郵便振替) 口座番号:01090-5-67283 口座名:資本論研究会
他金融機関からの振り込み 店名:109 当座 0067283

26巻第1号 目次

はじめに

読者のみなさまへ

『マルクスと商品語』の商品論概観

『マルクスと商品語』によせて(対話篇)

『マルクスと商品語』での拙著批判について

井上康・崎山政毅『マルクスと商品語』の薦め

——信用論研究会時代の回想——

(資料1) 復刻版: 間主体態の論理(1)

(資料2) 『共産主義』21号掲載論文 C 物象化と階級闘争

はじめに

今年に入って実は消耗な作業をやっていました。過去の自身の文献の再読と整理でした。文化知普及会を立ち上げ、聞き取り調査をした時に、課題の文章とした文化知に関する諸文書が、実は1998年に作成したものであり、それ以前とそれ以降の脈絡なしに提起したので、皆さん戸惑いを感じていて、これを何とかしたいと考えました。

振り返ってみて判明したのは、文化論については、1985年に『赤報』43号に掲載した「社会革命と文化」（次号で資料として公開します）にまで遡らなければならないことが分かりました。そして、1988年に社会運動と携わるようになり、協同組合の立ち上げに関わって、いろいろ研究した事柄が重なって、1994年に『共産主義』第21号（これが私たちの党派の最後の文献となりました）で党派に対するけじめをつけて以降の『ASSB』発行の過程で、文化知へと煮詰まっていたのです。

『共産主義』21号は次で読めます。

<http://www.geocities.jp/liberationsya/rg.html>

さて、文化知普及協会のホームページを5月に公開しました。「文化知普及協会」で検索すればヒットしますが次にリンクを張っておきます。

<https://www.cultural-wisdom.com/>

このサイトに、文化知提案にいたるいきさつは、以前に書いた「この15年をふりかえって」に加筆したものをこのホームページに掲載しています。

<https://www.cultural-wisdom.com/blank-45>

文化知普及協会は、英文も用意しており、日本語版からリンクしてあるので是非一度訪問してみてください。『ASSB』次号は、文化知での特集を組む予定です。その際に、「社会革命と文化」は古いフロッピーにデータが残っていたので、次号の資料としてつける予定です。なお、今号には、同じくデータが残っていた、ヘーゲル弁証法の転倒に関わる文献を二つを資料として収録しました。

さて、この作業の最中に、井上康・崎山政毅『マルクスと商品語』の書評に取り掛かりました。ところがこれが一筋縄ではいかない。共著ではあるが、商品論は井上さんが書いて、もっぱらそれを対象として取り組んでみましたが、普通の意味での書評は無理だと判断し、三つの批評を書くことになりました。

それでこれだけでは状況を知らない人たちには不親切だと判断し、改めて短文を書くことにし、それを冒頭に据えました。

なお、『マルクスと商品語』に関しては共著者の一人である崎山さんをお招きしてルネサンス研究所関西では7月21日（土）に公開講座を開催します。私も報告することになっておりますが、井上さんが来ないので、商品論ではなくて、架空資本論についてコメントするつもりです。

同じテーマに関連して、ルネサンス研究所関西での4月例会で、後藤さんが私の物象化論を取りあげてコメントしてくれました。「商品論批判の射程」がそれで次で読めます。

https://docs.wixstatic.com/ugd/ff0e58_falc0bba4c3649c3b8c7f727b1e44283.pdf

これに対してコメントしなければならないのですが、後回しにしています。

なお、三つの批評とは次です。

『マルクスと商品語』によせて（対話篇）

『マルクスと商品語』での拙著批判について

井上康・崎山政毅『マルクスと商品語』の薦め

——信用論研究会時代の回想——

これらの文書はルネサンス研究所関西の事務局内部では公開しています。今回収録に当たり若干の修正をしています。なお、冒頭に掲載した『マルクスと商品語』の商品論概観」

は今回新に書き下ろしたもので、三つの批評とは論点の重複がありますが、ご容赦ください。

読者のみなさまへ

本号は商品という身の回りの身近なものを扱いながら、きわめて繊細で小難しい議論を展開することになりました。それでいったん冊子を仕上げた後でお断りの文言を書くことにしました。

私が拙著『価値形態・物象化・物神性』で、『資本論』初本文価値形態論の解明に取り組み、新たに明らかにした重要な論点は三つありました。ひとつは価値形態における商品相互の間でなされている抽象化は、思考による抽象とは異なる事態抽象であり、その特徴を解明したことでした。ふたつ目は、商品自体がモノでありながら、人間と同じように思考し判断する概念的な存在であることの証明でした。最後に初本文価値形態論と交換過程論を通して読むことで、それまで理解されてはいなかった新たな貨幣生成論を解明できたことでした。貨幣は商品所有者が自らの商品に意志を宿すことによって生成されること、だから貨幣生成の行為は、商品所有者にとっては無意識のうちでの本能的共同行為となることでした。

『マルクスと商品語』の商品論の部分を書いた井上康さんは、最初の二つの論点を採用しながら、それをきちんと説明してはいません。また最後の論点については採用せず、逆に物象の人格化と人格の物象化という対句を、私がマルクスとは逆にしていることへの批判を提起しています。

私はこの井上さんのある意味で中途半端な理解は、ヘーゲル弁証法の転倒という問題と格闘しなかったところからきていると睨んでいます。私は拙著を書いた時期にはこの問題の解決には至ってはいませんでした。しかし、この書を上梓したころからヘーゲル弁証法の研究に力を入れ、一応の結論を導くことができました。

そういうわけでこれらの文章はヘーゲル弁証法の転倒という観点から読んでいただければ幸いです。資料1としてつけた「復刻版：間主体態の論理（1）」は価値形態論でのヘーゲル弁証法の転倒を始めて論じたもので、これをまず読まれることをお勧めしておきます。また、資料2「物象化と階級闘争」の方は、わからないままの私の解明の方向性を対話篇に託したもので、拙著上梓のころの問題意識が盛り込まれています。

『マルクスと商品語』の商品論概観

1. 商品語の〈場〉の設定とその問題点

冒頭商品論への商品語の〈場〉の導入

この書は二人の共著だが、商品論のところは井上康の作品だと推測できる。そして私が取り上げるのは井上の作品だけである。いったん、三つの批評を書いてみたが、事情に通じている関係者以外には分かりづらいと思われるので、前振りに概要を書いておきたい。

何か新たな思想を表明した最初の文献について、マルクスは無名の活動家のチラシの類まで参照文献として挙げている。しかしこの書は、新たな説を提起した過去の文献について言及せず、また引用もせずに、あたかも自分が発見したかのように記述しているので、書評を書きにくく、結果として三つの批評となってしまった。

そういうわけで、ここではまず井上の商品論の内容を、その展開を追って紹介することから始めよう。まずはしがきでこの書の目的が次のように述べられている。

「本書の目的は、『資本論』冒頭商品論の解説であり、それを第二版以降に述べられる『商品語』という概念に焦点をあてたうえで遂行するものである。・・・従来流布していたほと

んどすべての読みを覆し、『資本論』冒頭商品論の精確な読解をなせた、と自負している。」
（『マルクスと商品語』社会評論社、16頁、以下頁数のみの表記は同書）

この自負にもかかわらず、評価できるのは第Ⅲ章だけのように思われる。実際読んでいて、第Ⅲ章には力と熱がこもっていることが感じられたが、価値形態を論じている第Ⅳ章に入ると、途端に探求しようという熱が冷めてしまっていると感じてしまう。ところが第Ⅲ章は私の問題関心の外にあって、あとに掲載する三つの批評ではそれを検討はしなかった。

さて余談は置いておいて、内容紹介にもどろう。

第Ⅰ章では「冒頭商品理解の鍵としての商品語」というタイトルが与えられている。その冒頭に『資本論』から引用されているのは次である。

「商品価値の分析が先にわれわれに語った一切のことを、リンネルが他の商品、上着と交わりを結ぶやいなや、リンネル自身が語るのである。ただ、リンネルは、自分だけに通じる言葉で、商品語でその思いを打ち明ける。労働は人間的労働という抽象的的属性においてリンネル自身の価値を形成するということを言うために、リンネルは、上着がリンネルに等しいものとして通用するかぎり、したがって価値であるかぎり、上着はリンネルと同じ労働から成り立っていると言う。リンネルの高尚な価値対称性は糊でぐわぐわしたリンネルの肉体とは違っているということを言うために、リンネルは、価値は上着に見え、したがって、リンネル自身も価値物としては上着と瓜二つであると言う。ついでに言えば、商品語も、ヘブライ語のほかに、さらに多少なりとも正確な多くの方言をもっている。たとえば、ドイツ語の *Werthsein* は、ロマンス語系の動詞、*valere, valer, valoir* に比べると、商品 B の商品 A との等置が商品 A 自身の価値表現であることを言い表わすにはさほど適切ではない。

Paris vaur bien une messe !」（『マルクスと商品語』、21～2頁、『資本論』長谷部訳、河出書房新社、原典 56頁、）

井上によれば、マルクスは「商品語」という言葉をここでしか使っておらず、そのために、一般的にはこのパラグラフは比喻としてしか理解されてはいないが、それは誤りであり、このくだりはマルクスが商品語の〈場〉の存在を示したものであるとして読まねばならないという。そして商品語についていろいろ詮索し、商品が概念的存在であるという、私が苦労して解明した内容を剽窃して次のように述べている。

「商品はヘーゲルに倣って言えば理念としての存在、すなわち、概念と実在との統一であって、過程の中で、主体として自ら『判断し推論する』ものである。」（25頁）

ヘーゲルは商品を主体とは見ていない。だからこの記述はヘーゲルの弁証法の転倒について言及していないという意味で誤っている。私は1980年代半ばに、商品が自ら考えて判断を下す存在だと気づいて、このような存在をどのように名付ければいいのかを周りに聞いて回っていた。そのときに K 君が、ヘーゲルの概念論に依拠して「それは概念的存在と呼べばいい」と発案し、私はそれを採用したという経過がある。商品が概念的存在であることは、ヘーゲル弁証法の転倒抜きには解明できない事柄であり、このようなふやけた形での流通は阻止したい。商品が概念的存在であることについては、『価値形態・物象化・物神性』（207～8頁参照）、および『資本論の核心』（167頁以下）、を参照されたい。

このように先行研究を無視しているので、つい怒りが爆発することになるが、続いて佐々木隆治の商品語解釈の批判に移っていて、佐々木は商品語を比喻としてしか見ていないと述べている。しかし、商品語とは明らかに比喻以外の何物でもなからう。

第Ⅱ章には「人間語の世界に対するかぎりでの商品語の〈場〉」というタイトルが与えられている。まずは人間語の世界についての詮索があるが、中心は分析哲学の言語論の紹介とその批判である。そのあと、ヴィトゲンシュタイン、デリダ、ベンヤミンが取り上げられているが私の興味をひかないのでスルーしておきたい。

商品語の〈場〉とは何か 第Ⅱ章

この章の最後に取りあげられているのは商品語という〈場〉の説明である。まず、個々

の労働生産物の存在する前に商品の〈場〉はあると次のように述べている。

「ここで重要なのは、この特有の関係・運動の〈場〉が個々の労働生産物よりも〈先〉にあるということである。あらかじめ在るものとして〈場〉を措かねならない。資本主義的生産様式が支配する社会を対象とする限りこのことは不可避・不可欠であり、ここで商品〈場〉の根源を問うことは無意味である。」(57頁)

このあらかじめ在るものとしての〈場〉の根源を問うことは無意味だという。ある意味公理のようなものだと捉えられているのだろうか。ではその〈場〉の機能はいかなるものか。

「個々の商品が過程の主体になり得るのはこの〈場〉に組み込まれ支えられるがゆえにである。労働生産物という単なる自然物から商品という社会的な物象へのすさまじい変換の〈場〉があるのだ。」(57頁)

つまり個々の労働生産物が、商品となるのはこの〈場〉に組み込まれることによってであり、この〈場〉の存在と機能が労働生産物の商品への転化を媒介しているというのだ。そしてこの商品の〈場〉と照応して商品語の〈場〉があると次のようにいう。

「かくして、この商品〈場〉と照応し・付属したものとして商品語の〈場〉なるものを考えることができるし考えざるを得ない。過程の主体たる商品の運動、すなわち主体としての『判断』・『推論』等々としてあるもの、そうしたものとしてしか捉えられない諸商品の関係・運動を述べるものとして商品語を措くしかない以上、それはある何らかの〈場〉としてしか人間語には捉えられないものだからである。」(57～8頁)

井上は商品の価値形態を商品が商品語を語る〈場〉と見て、マルクスの価値形態論をマルクスによる商品語の翻訳と捉えているのだが、そのような立場から、商品の分析は商品語の翻訳によるしかなく、諸商品の価値形態の分析はこの〈場〉の根源を問うことになるので無意味だと考えているようなのだ。

このようなその根源を問われることのない商品〈場〉の設定は、ここから抜け出す道を人々から奪ってしまわないか。問題はそのようなアプリアリなく〈場〉の設定ではなくて、人々が労働生産物をこの〈場〉に投げ込めという行為そのものが意識はされてはいないとはいえ、この〈場〉を都度更新しているのではないのか。その意味では労働生産物を投げ込む行為それ自体に、この〈場〉の生成力があるのではないのか。マルクスの価値形態の分析は、市場に投げ込まれた商品それ自体の社会的関係を解明することで、人々が無意識に行っている行為の解明をし、そうすることで商品という物象による人格の意志支配の存在を解明したのではなかったのか。ところが井上による、人びとの行為と切りはなされたものとしての商品の〈場〉の設定は、次のような社会変革論をみちびくことになる。

「人間の類的性格が《商品〈場〉—商品語の〈場〉》として完全に転倒して現れている現実を、自然に支えられ、かつ自然の不可分な一環として存在する人間、この類的存在としての人間が、自らの自然的社会的な創造的諸力によって超克し得ることを明らかにしたのではないか、すなわち、まったく新たな類としての在り様を創造しうるものであることを示しているのではないだろうか。」(59頁)

このような社会変革論は、対象の認識から実践を跡付ける方法によるものであり、実践そのものを分析の対象とはしていない。商品の価値形態とは、人びとの労働という実践が意図しているわけではないとはいえ作り出した社会的形態であり、それがどのようにして形成されるのかをマルクスは明らかにしたのではなかったのか。それによって、資本主義的生産のもとでの実践を捉えかえすことで、もう一つの実践の可能性を導き出すことが可能となる。ところが井上のように、人間の実践(労働)から切りはなされたものとしての「商品の〈場〉」を措定し、その〈場〉の人間にとっての負のイメージを直観した人間が実践に走るという物語を描いたわけであるが、これは現世で頹落している自己を発見して頹落から主体性をとり戻すとしたハイデガーの実存主義の密輸入ではなかるうか。

2. 井上価値形態論の問題点

商品語の翻訳としての価値形態論という把握

商品の価値形態に関するマルクスの分析は、商品語の翻訳である、という論点は非常にわかりやすい。しかし、そうだとしたら、マルクスによる価値形態の分析はかえって不明確になるのではないか。商品語とさらにそれを商品が語る「パロール」としてとらえる井上の試みは、価値形態論研究の重要性を声高に訴える効果は持っているが、しかしマルクスの初本文価値形態論の内容を捉えるには不都合があるのではないか。

私見によれば、マスキュスが商品語と言っているのは、種々の価値形態に見られる諸商品の諸関係が形づくる社会的象形文字のことであり（『資本論の核心』125頁以下）、マルクスの価値形態の分析は、この社会的象形文字の解説であって、商品語の人間語への翻訳ではない。井上が目している第二版での商品語という言葉と、その文節での商品のパロールとしての価値形態についての陳述は、マルクス自身が解明し終えた初本文価値形態論での簡単な価値形態の内容を、商品自身の語りに翻訳することで、例示的に示したものであって、読者の直観に訴えているのである。

であるならば、マスキュスが商品に語らせた商品語は、論理ではなく感性的な表現であり、それを人間語に翻訳すればやはり感性的な内容にとどまらざるをえないのではなかろうか。

冒頭商品論の最初の価値実体の導出の部分で、二版の方がいいというのはその通りで、この証明は評価されるべきである。しかし、商品が商品語を語り、そのことで独自の場を形成しているという考え方はいただけない。井上は人間語の圏とは異なる商品語の圏があり、商品語を翻訳するのがマルクスだという見立てで、商品圏へは人間は立ち入れないという。

再度確認するが、マルクスの価値形態論を、商品語の翻訳だとすることで、井上は問題を抱えることになる。私はマルクスの価値形態論は、商品の価値形態という社会的象形文字の解説であり、価値形態の分析であるとみなしている。そしてその分析にあたって、ヘーゲル弁証法の転倒を価値形態の解明という素材に即して実際に実践したのだ。価値形態論が商品語のマルクスによる翻訳だというのなら、商品はこう語っている、という断言命題として価値形態論を理解することになり、弁証法の転倒もあったものではない、ということにならないだろうか。

冒頭商品論のマルクスによる改善の後付け 第三章

「人間語による分析世界としての『資本論』で出し部分の解説」と題された第三章は、井上が新しい説を打ち立てたと「自負」している冒頭商品論の最初の価値実体の導出の部分の解説である。マルクスは『資本論』現行版にも収録されている「第二版への後書き」で、冒頭商品論のこの部分の改善について説明しており、マルクス自身第二版の叙述を改善と見ていた。この問題を井上は、初版、第二版、フランス語版のそれぞれの記述を比較対照して、この改善について跡付けた。それはそれで評価されるべき業績であろう。

井上は注 21 で、拙著『資本論の復権』と『価値形態・物象化・物神性』をあげ、「これらを踏まえて新たな解釈を提示しているのである。」(123頁)と明記している。それだから、私の過去の見解を整理し、井上が本書で何を追加したかについて触れるべきなのであろうが、あいにく現在そのような作業に興味を持ってない。なので、この問題があることを指摘しておいたうえで、第三章への言及は終わりにしておこう。

商品語の〈場〉——価値形態 第四章

「商品語の〈場〉——価値形態」と題された第四章では、最初に「商品を作る労働の特殊歴史的規定性について」という考察から始まっている。商品語の〈場〉を語る前に、「商品を作る労働」についての考察が必要だというのである。そして次のように述べている。

「価値形態論が必要になるのは、商品をつくる労働のこのような特殊歴史的な在り様による。」(132頁)

これはリカードの経済学には価値形態論がなく、マルクスにはそれが採用されていること理由なのだが、このように考えるならば、労働生産物は商品語の〈場〉に投げ入れられるという、第Ⅱ章での考察と矛盾しないだろうか。というのも、ここでは商品をつくる「労働」自体に価値形態論を要請する原因があるというのだから。

リカードは交換価値を量的にのみ考察して、その質については考慮しなかった。ベイリーがこのリカードの旨点について、価値形態について考察し、マルクスはベイリー批判を通じて価値形態論への道を切り開いた。この歴史的経緯を踏まえるならば、労働の特殊歴史的な在り様から価値形態の必要性を跡付けるのは無理があろう。逆に価値形態論の解明によって、労働の特殊歴史的な在り様が解明されるのだ。ところが井上は、労働の考察の後結論的に次のように述べている。

「ここでは主体は人間ではない。諸商品の等置関係自体が、私的諸労働の社会的労働への転化を成し遂げるのである。それゆえ、人間語による思惟は、商品語の〈場〉に立ち向かい、その〈場〉の運動を看取し、商品語を『聴き取る』ことが絶対的・理論的要請として求められる。」(135頁)

この結論に井上の考察の限界とその問題点が凝縮されている。井上によれば、冒頭商品論の前半は人間語の世界であり、これに対して後半の価値形態は商品語の〈場〉であるという二分法が採用され、商品を作る労働と価値形態とが切断されている。その結果、井上の頭の中では、商品を作る労働の特殊歴史的な在り様をあらかじめ規定しておかないと、価値形態論が導けないという構造になっているのだ。しかし、商品を作る労働の特殊歴史的な在り様を解明するものこそが価値形態論だということに。

ついで、井上は初版本文、付録、第二版それぞれの価値形態論の比較に移っている。ここで初版本文価値形態論の第Ⅳ形態が貨幣形態ではないことが指摘されていながらも、その意味が解明されていない。それは初版本文価値形態論を次の交換過程論との関連で考察しようとはしていないからなのだが、その理由は次のような久留間批判の内容からきているようだ。井上は久留間の誤りを、「価値形態論から交換過程論までを一括りにして、それを貨幣生成論として捉」(346頁)えたことだとみているが、そうすることで初版本文価値形態論と交換過程論を通してみることで、従来誤解にみちていたマルクスの貨幣生成論を復元できることを見失ってしまっているのだ。このことに典型的だが、この比較対象の議論は面白くない。

次に「価値形態論の枠組み」が考察されているが、ここで井上は「初版本文価値形態論の論理的優位性」(141頁)と述べている。論理とは人間語の世界に属する。価値形態論は商品語の〈場〉ではなかったのか。論理が通用しない場ではなかったのか。引き続いて数学の観点からの考察がつづくが、数学も人間語の世界に属している。価値形態論は商品語のマルクスによる翻訳だという自説は撤回されたのだろうか、と思わずにはいられないが、しかし次に「価値表現において諸商品は何をどんな風に語るのか」ということが考察される。

その対象は初版本文価値形態論の一番理解が困難だとマルクス自身が言明している簡単な価値形態なのだが、その考察に際して井上はまた人間語と商品語の違いについて語っている。人間語は線形的で「線的な時間順序に従って言語空間が形成・展開される。」(149頁)しかし、商品語はそうではなく、「商品語の〈場〉においては、分節化が行われない。」(149頁)と述べた後、次のように述べている。

「さて、商品語の〈場〉を捉えるためには、諸商品がしゃべる商品語を〈聞き取り・人間語に翻訳し・注釈を加える〉必要がある。」(149頁)

このように述べて、初版本文価値形態論からの引用文に注釈をつけているのだが、井上によれば価値形態論とは、マルクスによる商品語の翻訳だったはずである。この翻訳について、解釈するとすれば、別の訳文を提案するしかないと思うのだが、井上はそうはしていない。

そうするかわりに井上は商品語の文法と思われるような約束事について「自然的規定性

の抽象化」という言葉でまとめている。

「自然的規定性の抽象化」について

分析的抽象の限界と、総合による事態抽象、そしてその特徴としての形態規定、という私の問題提起に対して、井上は分析的抽象の限界については同意しているが、事態抽象には「自然的規定性の抽象化」という用語を対置している。この井上の説明を見れば、私が強調している形態規定が見失われている。この考え方は、マルクスの文章を翻訳と見ることによって生まれたものだが、そうすることで現象形態そのものの把握が流動的な形でしか理解出来なくなるのだ。

井上による「自然的規定性の抽象化」についての理解は次のようなものだ。

「つまり商品 B は、現物形態のまま価値の現象形態になる。」(156 頁)

「ここでは、厳として存在しつづける現物形態、つまり現実の物質あるいは事柄そのものが、そのままの姿態が、抽象化されたものとして意義を持つことにならざるをえない。」(157 頁)

このような理解では、価値形態の秘密として一般に語られている使用価値が価値の実現形態となる、ということ以上の内容が語られているわけではない。問題はこの反照の弁証法の特徴を記述することにある。

反照の弁証法については本号に資料 1 としてつけた、「復刻版：間主体態の論理 (1)」で述べているのでそれを参照されたい。この文書は、井上も同人であった頃の『ASSB』誌、第 2 巻 5 号 (1995 年 2 月) 所収で、当然読んでいるはずである。なお、何故かこれはまだホームページで未公開だった。あと、資料 2 として、架空対話であるが、『共産主義』21 号に収録した「物象化と階級闘争」もヘーゲル弁証法の転倒について触れているので興味のある方はお読みください。

さて、まだ第 IV 章の半ばであるが、価値形態論をマルクスによる商品語の翻訳だとし、それを解説している井上にこれ以上付き合うのはやめておこう。第 IV 章以降は次の諸章で構成されている。

第 V 章 なぜ、第二版は初版本文の形態 IV を捨て貨幣形態を形態 IV をしたのか

第 VI 章 価値形態論と交換過程論との関係について

第 VII 章 <富—価値—商品>への根源的批判

第 IX 章 『資本論』冒頭商品論に関するさまざまな諸説について

初版本文第 IV 形態の扱いについてはすでにふれたように、誤った久留間批判によって、価値形態論と交換過程論とを一括して貨幣生成論とは読まないということなので、そもそも貨幣生成論が理解されておらず、検討する気も起らない。

第 VII 章が一応のまとめとなっているのだが、そこでは「物象」の規定と他方盛んに「無意識」という言葉が多用されている。ところが、私が初版本文価値形態論と交換過程論とを通して把握することで、新たに解明したマルクスの貨幣生成論が理解されていないので、物象の概念も無意識の概念も平板である。商品所有者たちの無意識のうちでの本能的共同行為が貨幣を生成し、しかも、この行為は商品所有者たちが市場に商品売り出す都度更新されている。だから商品の物象としての規定は人格に対する意志支配にあり、無意識とはこの意志支配のもたらすものなのだ。この理解がない「根源的批判」は言葉だけに終わっている。

第 IX 章での拙著への批判は別稿で回答してあるので、これで前振りはお終り。

『マルクスと商品語』によせて(対話篇)

2018 年 2 月 15 日 榎原 均

1. 『マルクスと商品語』の問題意識

Q: 井上康と崎山政毅による『マルクスと商品語』(社会評論社、2017年)が出版されましたね。

A: 私が、たまたま帰りのバスに同乗した友人から、著者たちの論文「商品語の〈場〉(1)」が掲載されている『立命館文学』(632号、2013年)の抜き刷りをもらっていたので一応目を通してはいましたが、それが単行本にまとめられたわけだ。『立命館文学』には、この号から始まり、633、635、638号(2013年~2014年)に続きが掲載され、ネットで読めるようになっていました。

Q: 著者たちは、『資本論』第二版にはじめて出てくる「商品語」のパラグラフに注目して、初本文も含めマルクスの価値形態論をマルクスによる商品語の「聴き取り・人間語に翻訳し・注釈を加える」作業の産物だと主張していますね。

A: 著者たちのこの主張はこれまで誰も唱えてはいなかったもので、オリジナルなものであり、妥当かどうかは別にして、センセーショナルな主張だね。金融商品も含めた商品批判が問われている今日、現代における資本主義批判は、商品批判にまでいたらないことには実践的なものとはならないとずっと考えてきた私にとっては援軍と位置づけて対話してみたい。

2. 佐々木隆治のコメント

Q: 『マルクスの物象化論』(社会評論社、2011年)を書いた佐々木隆治さんが、フェイスブックで次のようにコメントしています。

「『マルクスと商品語』という本を通読したが、本当にくだらない本だ。要するに、『俺の方が偉いだろ』と言ってマウンティングしているだけで、肝心な中身がなにもない。

良いように見える点は、久留間先生や大谷先生、そして私のパクリでしかないし、彼らの『オリジナリティ』を構成しているようにみえる要素はすべて誤読か、理論的な混乱でしかない。

最悪なのが、この本からは何の実践的指針も得られないことだ。」

A: 確かにこの本の第一部と第二部は、先行者の説への配慮がなく、結果として全部自分で考え出したのだという文脈になっています。『価値形態・物象化・物神性』を下敷きにしていながら、個々の論点提示の時に、そのことを明示しないので「パクリ」を言われても仕方がないところがあります。学界の作法から見れば「マウンティング」ということになるのかもしれませんがね。

Q: 実践的指針が出てこないという読後感は何にも聞いています。

A: 商品語の〈場〉を設定して人間語の場とは異なる〈場〉としてしまったので、そこから抜け出す道筋が描けず、しいて言えば「頹落」を実感して自らの実践を変革せよという主体性論的ニュアンスを感じてしまうのですね。

Q: 佐々木さんのコメントには自らの立ち位置が次のように述べられています。

「マルクスの理論を正確に解釈し、その実践的意義をできるだけわかりやすく、かみ砕いて実践家たちに伝えることに私はふだん心を砕いているので、こういう本はなおさら腹が立つ。」

A: 佐々木さんが商品語を比喻としてとらえている点を、著者たちは執拗に批判しているので、こういう立ち位置を確認したくなるのも無理はないのですが、「マルクスの理論を正確に解釈し、」というように言われると、言葉尻を捉える様で申し訳ないですが、理論の発展はどうするのだ、と問いたくなります。もちろん佐々木さん自身も理論の発展を求めて苦闘していると思うので、聞いてほしいのですが、多少の解釈上の誤りがあっても、理論の発展に寄与するところがあれば、それを育ててみたい、と私は考えます。

Q: よく榎原批判に、商品論だけで労働過程論がないという批判がされていました。こういう批判は実は商品批判の作業への不快感の表明なんですね。

A: 私自身 70 年代の初めころ『序章』10 号、11 号 (1973 年) に寄稿したルカーチ批判で、商品論だけで労働過程論や蓄積論がないという批判をしていて読み直して苦笑いしましたが。あのころは『資本論の復権』の原稿作成が進んでいて、労働過程だけでなく資本の蓄積過程での取得法則の転変まで、見通していたのです。結局現在どういう意味で商品批判が資本主義批判の要であるかを伝えなければならないのでしょうか。その作業から見れば、この本は援軍とみなした方がいいでしょう。

3. ソ連の崩壊の原理的根拠と商品批判

Q: リーマン・ショックの後、資本主義批判の必要性は大勢の人々に感じられているようになったことの証拠として、ソ連崩壊後忘れ去られていたマルクスの著書への注目がありませんね。

A: いわゆる左翼は、ソ連崩壊後に左翼をやめた連中は除外して、ソ連崩壊の総括ができていないのですね。だから左翼の言説には、どこかごまかしたような節があり、人々は敏感にそれに反応してきたのでしょうか。しかし、ソ連崩壊後に世界を制圧した資本主義が新自由主義の教義に支配されたときに、資本主義も大丈夫かという問いが出てくるような今日の事態に立ち至っているのですね。ではマルクス主義と大衆運動とが復活してきたから、従来の左翼でいいかと言えば、そうはいかないのですね。

Q: ルネサンス研究所関西では、「左翼はなぜ影響力を失ったのか」というテーマで研究会を組織してきましたね。

A: ルネサンス研究所での議論は、冊子『日本の左翼はなぜ影響力を失ったか』(500 円、ルネ研関西 HP で受付) も出ているし、ホームページもあるのでそれを見ていただくとして、

<https://www.runekenkansai.com/>

私自身は、『資本論』初本文価値形態論と交換過程論とを通しで読むことで、商品からの貨幣生成が、商品所有者たちの本能的共同行為によるというマルクスのメッセージを読み取り、ソ連崩壊直前の 1989 年に「緊急の課題」で、プロレタリアート独裁の政治権力をもって商品経済をなくしていくという構想が無理筋であることを明らかにしました。ここから迂回路の必要性を痛感し、政治運動だけでなく社会運動による迂回路形成の試みが続けてきました。政治運動の場合は商品批判は直接には問題にはなりません、社会運動をラディカルに展開しようとするれば、商品批判が要になるのです。

Q: そういえば生活クラブ生協の創業者岩根邦雄さんは、自らが扱う材を商品ではなくて「消費材」と命名することで商品批判の観点を運動の中に持ち込みましたね。

A: 生協運動は市場外流通の組織化ですから、商品批判の観点があれば、迂回路の形成に結びつく陣地戦の陣地たりうるでしょう。それ以外にも百姓を志したり、田舎暮らしを求めたり、都市でのまちづくりや地域づくりに取り組もうとするときに、資本主義批判だけでなく商品批判がないと、運動として成り立たないと感じています。

Q: ソ連崩壊の原理的根拠の発見前には「社会革命と文化」(『赤報』43 号、1985 年、この論文は次号で資料として紹介します。) で文化革命論の検討をしていましたね。

A: あの頃の論文は、1970 年代の武装闘争の敗北の総括を踏まえて新たな前進を求めて書いてものです。その論文では文化革命をレーニン、毛沢東にさかのぼって点検しただけではなくて、マルクスの政治理論の復権のような作業もしました。

そこで再発見したのが「政治的精神をもってする社会革命」か「社会的精神をもってする政治革命」か、という『批判的論評』で展開されたマルクスの議論で、この論文は表三郎さんから教えられました。このマルクスの論文は、シュレーゲンの労働者蜂起についての『フォルヴェルツ!』掲載の一論文への批判なのですが、そこでマクスは、この対句で問題を考察しているのです。

この論点は、「社会革命と文化」で研究しただけで、その後応用してきていませんが、この論点はソ連崩壊の総括と以降の運動の展望を紡ぎ出すのに有効な視点だと思います。改

めて紹介しておきましょう。

「政治的精神をもってする社会革命」とは、批判対象である論文が述べている政治的態度なのですが、マルクスによれば、それは、社会問題を政治の問題として政治的理解力をもって把握し、その政治力をもって社会を変革しようとする試みで、マルクスはフランス革命にその古典的な例を見えています。そしてその限界は「意志の全能をますます信じ、意志の自然的かつ精神的限界がわからなくなり、こうして社会的欠陥の原因がますます発見できなくなる。」(『マルクス・エンゲルス全集』第1巻、439頁)と述べています。この記述はのちのソ連でのスターリンの政治を予言しているかのようです。

この『フォルヴェルツ!』の論文の政治的立場にマルクスが対置したものが「社会的精神をもってする政治革命」でした。それは、政治の枠を従属化した社会的理解力に基づいた政治運動でした。このマルクスの政治理論はソ連崩壊後の政治についての示唆に富む提案としての意義があります。そしてここから、現代の資本主義の下でも革命後の政治の必要性が問われているという問題や、政治の基準を文化におくといった提案が出てきたのです。

4. 改めて今なぜ商品批判なのか

Q: ソ連の崩壊も商品の価値形態論から解ける、という話でしたが、少し触れていた、社会運動にとっての商品批判の必要性について補足してほしいですね。

A: 政治権力によって商品・貨幣はなくせない、とすれば迂回路が必要ですが、実は迂回路の萌芽はいっぱい生成されてきています。先に例示した生協は市場外流通ですが、雇用されない働き方は、それ自体資本を包囲する陣形です。いままたグラムシの陣地戦が目立っていますが、グラムシが指摘したのは、西欧の市民社会では支配階級が陣地戦をやっていることで、ロシア革命のような一気の権力奪取は無理だということでした。彼自身は味方の陣地戦をどう組織するかについてまでは述べてはいません。

機動戦と陣地戦、というのは軍事用語ですから、言葉にとらわれてはダメで、陣地戦の具体的な中身がいま問われています。雇用されない働き方は資本主義批判にもとづいていきますし、市場外流通は商品批判にもとづいています。つまり陣地とは資本主義批判と商品批判が生み出す事業体なのです。そしてこれらがコアになって地域での陣地形成が可能となります。イタリアのボローニアなどの都市に見られる「協同組合地域社会」はその一つの例です。

Q: でもそのような陣地は従来の左派からすれば物足りないのでしょうか。曰く政治がない、権力奪取が展望できない、など。

A: だから私は政治運動と社会運動を横断するような「大きな物語」が今必要だと感じています。政治はベクトルの向きをそろえて相手に打撃を与えようとしています。これに対して社会運動はベクトルの方向はさまざまで合力ゼロとなったりもしますが、しかし、その存在そのものの重みという力があります。これが現実社会を変化させていきます。お互いに力の発現様式が異なることを理解し合うべきでしょう。そして異なる力の発現をそれぞれ位置づけられるような社会変革の大きな物語を紡ぎ出すのです。

5. 過去の理論的活動から

Q: 著者たちとは昔からの知り合いだそうです。

A: 井上さんも崎山さんも、私が1983年に出獄して以降、表三郎さんや八木俊樹(故人)と一緒に信用論研究会をやっていたメンバーで、その時の共通の問題意識は、商品を悪ととらえて批判しようというものでした。これはもともと「量子商品論」を唱えていた八木の発想でした。私は60年安保闘争敗北後、ロシア革命に続くはずであったヨーロッパ革命が挫折した原因の解明にとりつかれており、最初のころは労働者が労働力商品所有者意識を克服できなかったことに求めています。またルカーチの物化論や黒田寛一の主体性論(プロレタリア的人間の自覚の論理)ではこの意識の克服はできないと考えていました。

ルカーチの『歴史と階級意識』（未来社）は、やはりヨーロッパ革命の挫折の総括としての意義をもって、彼は労働者を物化、つまり商品とされた存在として捉えて、この存在から彼らがいかにして階級意識を持つにいたるかを、物化されている自身の生活の歴史的反省から解こうとしていました。ルカーチはもともと「物化」論ですが、平井俊彦によって「物」と訳すべき「Ding」が「物象」と訳されて「物象化」論の典型とされ、以降の日本における「物象化論」の混乱は甚だしいのですが、それについては『資本論の核心』（25～27頁）を参照してください。こんな分かり切った誤訳が未だに学界では続いているのです。

また戦後日本で登場した主体性論争と、それを摂取した黒田寛一の主体性論も、ルカーチの提起を踏まえたひとつの解でした。それに対して私たちは主体性論ではない解を求めて、商品批判へと進んだのでした。

Q: 当時の商品批判の必要性の認識の経過はわかりましたが、現在との関係でとらえなおすとどうなりますか。

A: 労働者をめぐる現在の思想状況は、労働力商品所有者意識からさらに進んだところに来ています。新自由主義が「人的資本論」を唱えています。この立場は労働力を資本に擬制し、労働者を人的資本ととらえます。日本ではアメリカのようにこのような考え方はもろには普及しませんでした。商品所有者意識から貨幣所有者意識への進化が見られ、私はこれを自己神格化ととらえていました。

労働力商品所有者意識は、労働者の団結と労働組合の必要性を求めます。しかし、貨幣所有者という意識については、高度消費社会の神様としての消費者という意識にまで進化すると、労働組合のような人間的連帯は忌避されていきます。さらに人的資本の所有者という意識にまで高まれば、諸資本の競争に巻き込まれ、万人が競争状態にあるという意識が生まれ、みんながお互いにライバル視し合うことになります。

このような推移は、事態の一面で、90年代初頭の不動産バブル崩壊後、敗者が膨大に生み出され、格差拡大が進み、人々の新たなグローバルな連帯意識も形成されつつありますが、日本の場合は、この連帯意識はまだ未熟な状態です。

5. 金融商品＝負債、の批判も

Q: またニューヨークの株式市場でバブルが崩壊し、世界的に株安になっていますね。

A: ブラックマンデーの再来と言われていますが、負債経済と負債資本が支配しているグローバル資本市場の分析が急務ですね。利子生み資本は資本の商品化と言っていますが、ではその金融商品とはいったいなになのか。金融商品は負債ですが、その負債に二つの種類があり、資本家への貸付とそれ以外の貸付を区別しなければならないでしょう。

Q: 消費者金融や、国債、住宅ローンを含む不動産ローンなどがそれですね。

A: これらはそれ自体としては必要に迫られてローンが組まれるわけですが、問題はこれらのローンが証券化され、グローバル資本市場で売買されるようになったことで、消費者ローンや住宅ローン等の負債が変異を起こし負債資本と呼ぶ他にないような存在となっていることです。そしてこの変異体は資本主義社会を蝕むガン細胞のような働きをしています。リーマン・ショック後に株価はまた上昇しましたが、各国中央銀行は前例なき金融緩和からの抜け道がなく、超低金利は銀行などの金融機関の体力を削いでいっています。資本に利子につかない、という現実には利子生み資本だけでなく、資本一般の否定であり、まるで資本主義の総本山である中央銀行自らが、資本主義の店じまいをしようとしているかのようです。

Q: このような時代には投機をするしかなくなっているのでしょうかね。

A: グローバル資本市場には膨大な過剰資金があり、これが投資先を探して、ハイリスク・ハイリターンであるような金融商品を作るように投資銀行などにせっついているという現実があります。銀行などの金融機関も貸付利子では経営できなくて、手数料収入や、投機の商品の販売でしのいでいる始末です。故八木俊樹は、1970年代に現代商品に「量子商品」

と名付けましたが、まさに負債資本はプラズマのようです。それは、個体や、気体や、液体ではない第四の存在様式として、これら三界を自由に出入りしているかのようです。つまり、現実の商品や貨幣に憑りついて、負債経済に富を移転しているのです。

Q：グレーバーの『負債論』が顧みられるべきですね。

A：グレーバーの大著にはいろいろ面白いことが書かれていますが、一点だけと言われれば、貨幣ができる前とそれ以後の借り＝負債に関する考え方が根本的に変わったということ指摘している点です。彼は、貨幣ができて以降は、人々は宇宙をも取引相手と考えるようになっていくと指摘し、そして基本的人権という考えも、この土台の上に成立している擬制的な思想だと批判しています。結局現代における商品批判は、資本の商品化の検討を踏まえ、負債の批判にまで進まなければならないのでしょう。

6. マルクス・レーニンを越えて大きな物語を紡ぎ出そう

Q：マルクスやレーニンには理論的作業について遺言めいた提言がありますね。

A：私は以前に「物象化と階級闘争」（末尾に資料として掲載）というタイトルつけ『共産主義』21号（1994年、）に、彼らの遺言の執行について対話の形で掲載しています。そこで取り上げたのは、マルクスがヘーゲル弁証法は転倒している、これの転倒についていつか書きたい、とメモしていたのと、レーニンが、ヘーゲル論理学を研究せずには『資本論』は理解できないとメモしていたことでした。

今回の著者たちの提案に関連していえば、マルクスの価値形態論に関しては、第二版での書き換えを重視するのではなくて、初本文価値形態論と交換過程論を通して理解するということが重要なのですが、そのこと自体、『資本論』の商品論の従来の解釈を越える試みです。

大きな物語について、私は、政治運動と社会運動を横断した新しい政治の組織の仕方自体を考える必要があると思っています。いまさらマルクスのような人物が一人で提案できるような時代ではありません。また既成の党派がやれるとは考えられません。反資本主義、反商品の側にいる人たちの共同作業のビックデータを作り、だれでもアクセスできるような仕掛けが必要でしょう。

7. 商品語の〈場〉について

Q：最後になりますが、著者たちの商品語の〈場〉に関して議論しましょう。

A：もともとのマルクスの商品語のくだりは次のところです。著者たちの本から引用しておきましょう。

「商品価値の分析が先にわれわれに語った一切のことを、リンネルが他の商品、上着と交わりを結ぶやいなや、リンネル自身が語るのである。ただ、リンネルは、自分だけに通じる言葉で、商品語でその思いを打ち明ける。労働は人間的労働という抽象的的属性においてリンネル自身の価値を形成するということを言うために、リンネルは、上着がリンネルに等しいものとして通用するかぎり、したがって価値であるかぎり、上着はリンネルと同じ労働から成り立っていると言う。リンネルの高尚な価値対称性は糊でごわごわしたリンネルの肉体とは違っているということを言うために、リンネルは、価値は上着に見え、したがって、リンネル自身も価値物としては上着と瓜二つであると言う。ついでに言えば、商品語も、ヘブライ語のほかに、さらに多少なりとも正確な多くの方言をもっている。たとえば、ドイツ語の *Werthsein* は、ロマンス語系の動詞、*valere, valer, valoir* に比べると、商品 B の商品 A との等置が商品 A 自身の価値表現であることを言い表わすにはさほど適切ではない。

Paris vaur bien une messe !」（『マルクスと商品語』、21～2頁、『資本論』長谷部訳、河出書房新社、原典 56頁、）

著者たちによれば、マルクスは「商品語」という言葉をここでしか使っておらず、そのために、一般的にはこのパラグラフは比喩としてしか理解されてはいないが、それは誤り

であり、マルクスが商品語の〈場〉の存在を示したものとして読まねばならないというのです。

Q：商品語に注目した研究としては、先にあげた佐々木隆治『マルクスの物象化論』がありましたね。

A：佐々木さんの著作は力作で、物象化論に関心がある私としては読んで書評めいたものを書きましたが、「商品語」についても彼は色々考察しています。私はマルクスの「商品語」という考え方についてそれまで定見がなかったのですが、佐々木さんの著作を読むことで自身の見解がまとまった、という経過があります。それは商品語というものを「社会的象形文字」としてとらえるというもので、『資本論の核心』（情況新書、2014年、125頁以下）にその観点を書いておきました。つまり「商品語」とは、商品の現象形態、と言っても、人の目に映る幻影的形態ではなくて超感性的な現象形態のことですが、それを表示する「社会的象形文字」のことだという理解です。

ちなみに、この拙著の初本文価値形態論の解説（第2章～第6章）は、1980年代後半に録音した『資本論』の講義テープの文字起こしに手を入れたもので、私の最新の見解です。著者たちはテープの講義は聞いているはずですが、私の「商品語」についての最終的な見解は検討できていないと思われまます。

『マルクスと商品語』での拙著批判について

2018年2月22日 榎原 均

1. 『マルクスと商品語』による榎原批判の内容

著者たちは、私が「人格の物象化と物象の人格化」という対概念を使っているが、マルクスの対（「物象の人格化と人格の物象化」）とは逆になっていることが問題だ、と批判している。マルクスの『資本論』までの使用例から「人格の物象化」が概念としては明確ではないことを証明し、私の使用例からもそれがなされてはいないという批判が展開されている。いくつか引用しておこう。

マルクスの場合「物象の人格化」は概念として明確に規定されているが『人格の物象化』は、それほど明確な概念ではない。（『マルクスと商品語』、355頁）

「榎原にとっては、『物象の人格化』よりも『人格の物象化』の方が、より重点をおいて説明されなければならないものだ、ということがわかる。」（同書、360頁）

「物象の人格化を解明する際に問題となるのは、いかにして物象が人格の意志を支配するか、ということであることがわかる。」（同書、361頁）

「人格に対する意志支配にいたる、人々に対する諸物象の支配という事態を、榎原は『物象の人格化』というのである。以上のことから、彼が『人格の物象化』を『物象の人格化』より先にもってこなければならなかった理由がはっきりする。『人格の物象化』にもとづいて『物象の人格化』が生じる、と榎原は考えているからである。つまり彼は、初本文の価値形態論で、とりわけ形態Iで『人格の物象化』の原理が明らかにされ、これをうけて交換過程論において『物象の人格化』が解かれると考えているからである。」（同書、362頁）

「この対概念、とりわけ『人格の物象化』なるものは概念としてきちんと定立されているであろうか？」（同書、362頁）

結論的にこう言っている。

「彼が諸事態の内実について分析し解き明かしたところは、実に精確であり高い水準を示している。ところが、残念なことに、その解明に不要な対を充てて、理解に覆いをかぶせているのである。」（同書、364頁）

2. 佐々木隆治へのコメントでの躊躇

昔の大学の教師のように、一生同じ講義をしている身ではない私にとって、一書を書きあげれば次のテーマに向かう。なので、『価値形態・物象化・物神性』に何が書いてあるかなどは気にかけてはいなかった。ところが佐々木隆治『マルクスの物象化論』が出たのでそれへのコメントを作成しようとしたときに過去の拙著の読み直しを迫られた、そのときに、この対がマルクスとは逆になっていることに気づき次のように書いた。

「さて、今から思えば、価値形態論は物象の成立とその秘密を解説したものだから、人格の物象化の原理というよりは物象の人格化の原理としたほうが分かりやすかった。対句として『人格の物象化と、物象の人格化』というように使われるのだが、これは『物象の人格化と、人格の物象化』とした方が事態に迫っている。人の手になる労働生産物が商品という物象に転化する過程はたしかに人格の物象化過程ではあるが、この過程から商品の秘密が解明しうるわけではない。一旦成立している商品の価値形態そのものの形式内容の分析から出発すべきだから、人格の物象化過程は捨象したうえでの商品の分析が問われている。だからこれは物象の成立過程の分析なのであり、物象の人格化過程の端緒として規定したほうがベターである。

そして、この物象の成立と、その物象が意志支配のメカニズムによって人格の意志を捕捉して人格化していく、その裏面が人格の物象化である。とすれば、先に見た佐々木の人格の物象化論は、マルクスの物象化論の解釈としては歪んでいることになる。」(『ASSB』21巻4号、21頁)

http://www.office-ebara.org/modules/weblog/details.php?blog_id=223

(なお、紙媒体の読者は、HP オフィス履原で「佐々木隆治」で検索してください)

佐々木は物神性論に依拠して「人格の物象化」を論じている、それにコメントしているうちに、私がマルクスの対を逆に行っていることに気づき、この時点では率直に反省してみた。だから、著者たちのような批判が出ているのは当たり前と言えれば当たり前である。

3. 『季報唯物論研究』寄稿論文での利子生み資本における物象化の研究

しかし、利子生み資本における物象化についてその後調べてみて、「人格の物象化」を先にもってくる必要性について明確となり、『資本論の核心』では、その線を書いた。

さて、『資本論』第三巻利子生み資本の研究は、『価値形態・物象化・物神性』を書いた当時とは、大谷禎之介のマルクスの草稿の翻訳はごく一部分であり、草稿に依拠して研究を進めようと考えて、商品、貨幣、利子生み資本での物象化のそれぞれの相違に関して考察した際、利子生み資本についての全体的な研究はあきらめていた。しかし2000年代には利子生み資本の部分の草稿はすべて翻訳され、研究の条件は整っていた。

寄稿論文「利子生み資本における物象化」はこのような研究条件の下で改めて物象化と物化（物神性・神秘化）の厳密な区別に成功した『資本論』初版本文価値形態論の到達地平から、マルクスの物象、物象化、物化についての意味内容の変遷を探ってみた。

その前提作業として、初版本文価値形態論と交換過程論を通して見ることで、物象化の仕組みと物化・神秘化における商品と貨幣との相違について次のように明らかにした。

「だから、『資本論』初版の商品節、および交換過程節に依拠することで、商品における物象化の仕組みと物化・神秘化との違いとその関連、及び、貨幣における物象化の仕組みと物化・神秘化の違いとその関連が次のように理解できる。商品にあっては物象化が価値関係における等価形態にある商品の使用価値を価値の化身とするという仕組みでなされることで、等価商品の使用価値が幻影的形態をつくりだしているの、人々の認識における物への順応が生まれ、物象による意識支配がみられる。これに対して、貨幣のばあいには、商品所有者たちが商品という物象に、自らの意志を宿すことで貨幣を生成することが物象化の仕組みであり、幻影的形態は等価形態の謎性が、単一の商品金に与えられている点で、より一層発展したものとなる。であるから、双方の物象化の相違点として、貨幣にあっては、物象による意志支配がなされている。つまり商品と貨幣とでは、物象と人格との関係

において、意識支配と意志支配の違いがあるのだ。そして神秘化について言えば、商品にあってはまだ単純であるが、貨幣にあってはより複雑なものとなっているのだ。」(メール版『ASSB』23巻3号、2015年、21頁)

<http://www.geocities.jp/liberationsya/assb23-3.pdf>

(なお、紙媒体の読者は、「メール版 ASSB」で検索してください)

ところで拙著『価値形態・物象化・物神性』では、『資本論』第三卷三位一体的範式での物象化論について取り上げたところで述べていたことを踏まえ、次のように続けている。

「拙著では先の『見える』という観点について『ここで剰余価値の形態の自立化と、それがどのような仮象を人々の意識に生み出すか、ということとが区別されていることに注意しておこう。前者は物象化に関連し、後者は物化に関連する。』(拙著、165頁)と述べておいたが、ここでマルクスは、物化に関しては、『社会的諸関係の物化が、質料的生産諸関係とその歴史的・社会的な規定性との直接的癒着』と述べ、物象化に関しては『諸物象の人格化と生産諸関係の物象化』あるいは、『生産諸関係の物象化・および生産当事者たちによる生産諸関係の自立化』と述べて双方を区別しているのである。

つまり物化は歴史的・社会的な規定性が、質料的生産諸関係と癒着し、例えば銀行券の紙券という質料的素材に、一般的購買力という歴史的・社会的属性を付与されるかに見える事態を指している。他方物象化は、諸物象の人格化、あるいは生産諸関係の物象化、つまりは物象による意志支配を指していることが判明する。そしてこの意志支配は、人格を無意識的に支配する自然法則として現われるのだ。」(同書、23頁)

このように三位一体的範式で物象化と物化との区別がなされているとしたら、利子生み資本論は三位一体的範式の前に書かれた草稿であるが、それをマルクスが物化と物象化とを切り離して考察するようになったきっかけとして改めて読んでみた。

『資本論』第三卷、第21章から始まる利子生み資本論は、第24章で、資本関係一般の外面化を論じ、利子生み資本に則して物象化をとりあげている。しかしこの草稿は、先述したように、『資本論』初版価値形態論での、物象化と物化との厳密な区別つける以前のものであり、この区別が意識的にはなされていない。だから、資本関係の外面化について次のように述べられることになる。

『利子生み資本において、資本関係はその最も外面的で最も物神的な形態に到達する。ここでは、われわれは、G-G、より多くの貨幣を生む貨幣、自己自身を増殖する価値を、これらの極を媒介する過程なしにもつのである。』(大谷、『経済志林』57巻2号、60頁)

ここでは利子生み資本の場合の資本関係の外面化が指摘され、それが物神的な、つまり神秘的な形態をまとうことが指摘されてはいるが、どのような関係が利子生み資本における物象化であるかは説明されていない。」(同書、23～4頁)

いったんこのように判断できるが、しかし第24章には、物化と物象化を区別しようとする記述がある。

「見られるように、利子生み資本にあっては、社会関係が物として現われ、このことが神秘性をもたらすことが指摘されてはいるが、これはいわば価値形態の謎性、価値関係において等価値形態にある商品の使用価値が、この関係の外でも、その使用価値自体が交換可能性という属性をもつように見える、という問題と同等の物化の次元での規定である。価値形態の秘密(原文の謎を秘密に訂正)にあたる、物象化の仕組みが、利子生み資本に関しては述べられてはいないのだ。では単なる物化論かということ、もちろんそうではない。マルクスの物象化論は、『資本論』初版の本文及び付録の二つの価値形態論以前には、物象化と物化が一体となって論じられていたのだ。いま、初版の見地から、一体となっている叙述から、利子生み資本における物象化を取り出すことで問題整理をしよう。その手掛かりは次の記述にある。

『次のこともねじ曲げられる。——利子は利潤の、すなわち機能資本が労働者から搾り取る剰余価値の、一部でしかないのに、いまでは反対に、利子が資本の本来の果実、本源的な果実として現われ、利潤はいまでは企業利得という形態に転化して、たんに生産過程

および流通過程でつけ加わるだけの附属品、付加物として現われる。ここでは資本の物神的な姿態と資本物神の観念とが完成している。われわれがG-G'でもつのは、資本の無概念的な形態であり、最高の展相〔Potenz〕における、生産諸関係の転倒および物象化である。利子を生む姿態は、資本自身の生産過程に前提されている資本の単純な姿態である。自分自身の価値を増殖するという、貨幣の、商品の能力——最もまばゆい形態での資本神秘化。』(大谷、『経済志林』57巻2号、67頁)

ここでマルクスは、利子生み資本における物象化について言及している。資本制的生産に前提される利子を生むという姿態は、生産過程を経過して初めて実現するのだが、ここではその関係が転倒して、この前提だけで利子を生むという形態が成立しているのだ。このように利子生み資本における物象化は、生産過程を消去しているのであり、社会関係の物象化自体が資本関係一般の外面化であり、物化という幻影的形態と切り離しえないのだ。』(同書、24頁)

このように利子生み資本論で萌芽的に示された物象化と物化との区別が、三位一体的範式において具体的に記述されるにいたったのだ。しかし物象化と物化との区別にはたどり着いたものの、物象として存在している商品の分析は『資本論』初本文価値形態論まで待たなければならなかった。

マルクスは、商品からの貨幣の生成を、初本文価値形態論と交換過程論を貫いて論じることで、商品という物象の人格化を貨幣生成における人格に対する商品の概念による意志支配として解明することができた。これを反面解釈すれば、人格が物象化する仕組みが暴き出されたことになる。この意味で初本文価値形態論と交換過程論で展開されたマルクスの物象化論を踏まえれば、人格を物象化する仕組みにたとえ無意識だとはいえ、人格が関わることで物象が成立するという、物象化の主体的把握が可能となる。つまり疎外とみなされている事態の主体的解明がなされるのだ。

4. なぜ「人格の物象化」を先に置いたのか

『価値形態・物象化・物神性』は『資本論』を物象化論として読む試みであり、それも当時巷で流行した廣松渉的な物象化論や、ルカーチ的物化論とは異なる内容、つまり、物象化と物化とを区別し、物象による人格の意志支配を暴き出す試みであった。最初からこの見地があって書き始めたのではなくて、書いているうちに内容が固まってきたという経過がある。だから価値形態と物象化について、この拙著では、三度も立ち返って論じ、最終結論は第6章で与えられている。

しかし、第2章の最初に取り上げたところすでに「人格の物象化」を先にもってきている。この初稿は『赤報』44号(1985年)の掲載されたもので、当時において完成した見解があったわけではないので、この場合は感覺的確信で「人格の物象化」を先にもってきたのだと思われる。もともとマルクスの物象化把握は、物象の人格化であり、これを疎外ととらえていた。物象の人格化は理解しやすいが、人格が物象化する仕組みは『経済学批判』や、『資本論』第三巻草稿の時点では、マルクスにとっても解明できなかった。その解明にはじめて成功したのが、初本文価値形態論と交換過程論である。このことを理解した私は無意識ではあるが、「人格の物象化」を先にした。

すでに挙げておいたように、佐々木隆治の業績を検討した時に、改めてマルクスの対と逆になっていることに気づいて、とりあえずはマルクスの対の方が理解しやすいと述べた。しかし、利子生み資本論における物象化の研究は、すでに述べたように、マルクスの対をひっくり返すことの意義を明確にすることとなった。『マルクスと商品語』での批判を受けて、その意義を改めて明らかにしておこう。

まず著者たちが『資本論』初版以前のこの対の使用例を検討していることについては、基準がバラバラで到底研究とは言えない。というのも資本における物象の人格化と、商品、貨幣のそれとを同一に扱っているからだ。商品、貨幣、資本、それぞれにおいて物象の人格化の仕組みは異なる。

次に、マルクス自身『資本論』以前では物象化と物化とを区別できておらず、資本という物象の持つ力や貨幣という物象の持つ力を疎外として考察していた。とはいえミル評注において、「人格に対する人格の支配であるものが、今や、人格に対する物象の、生産者にたいする生産物の、普遍的な支配となっている。」(『マルクス・エンゲルス全集』40巻、374頁)という観点が表明されていることに注目すべきである。マルクスは疎外の中身を物象化の問題ととらえることで、新しい地平へと進んだのだ。すでに『価値形態・物象化・物神性』第4章で書いたことなのでこれ以上は詳述はしない。

さらに、商品という物象についての分析が『資本論』の初版本文価値形態論でなされ、物象化と物化が価値形態の秘密と謎ということでも明確に区別されるにいたった段階で、さらには第IV形態と交換過程論との通した読みによって、商品における物象化と貨幣における物象化を統一的に把握することでマルクスの対をひっくり返すことになった。

これのミソは、ひっくり返すことで人格の物象化する仕組みを重視しそこから抜け出す道が開けてくることだ。しかし、著者たちは、交換過程での意志支配についてはまるで関心をもってはいない。

人格の物象化を先にもってくることで、物象の人格化の結果としての人格の物象化ではなく、人格がみずからを物象化することで物象が成立するという仕組みが解け、そうなることと人格による脱物象化の可能性が開けてくる。私の地平はそこにある。

5. 著者たちの解釈の難点

まず、私の主張を正しくとらえてはいない。

著者たちは、拙著の「人格の物象化」把握を次のようなものだという。

「この語句で言われているのは、『私的生産者たちの私的労働の社会的な諸規定が労働生産物の社会的な自然被規定性としてあらわれるということ、人々の社会的な諸生産関係が諸物象の対相互的および対人的な社会的な諸関係として現れること』であった」(『マルクスと商品語』、363頁)

ここで二重カッコに入れられている文章は『資本論』初版からの引用である。確かに私は拙著第2章ではそのように述べている。しかしこの規定は拙著にとっては最初の規定であって、その後第3章第3節を経て、第6章で完成された見解がまとめられている。著者たちはそのことがよくわかっているが、第2章の後での拙著の議論についていけない。

その理由は、価値形態論をマルクスによる商品語の翻訳と捉える著者たちの大前提から来ていると思われる。価値形態論がマルクスの訳文だとしたら、これの解釈とはいったい何なのだろうか。

マルクスが商品語を翻訳したのは、二版で加えられた箇所での商品のパロールをマルクスが披歴したパラグラフだけである。商品語とは価値形態で示されている社会的象形文字としての商品のことを指しており、マルクスはそれをヘーゲル弁証法を転倒して解釈したのだ。

せっかくの機会なので、価値形態論におけるヘーゲル弁証法の転倒について述べておこう。外の主体の弁証法の適用として、価値形態論を読むのである。

著者たちは、「ここでは主体は人間ではない。諸商品の等置関係自体が、私的諸労働の社会的労働への転化を成し遂げるのである。それゆえ、人間語による思惟は、商品語の〈場〉に立ち向かい、その〈場〉の運動を看取り、商品語を『聴き取る』ことが絶対的・理論的要請として求められる。」(『マルクスと商品語』、135頁)

これが著者たちの価値形態論解釈の肝であるが、マルクスを翻訳者に貶めてはいけない。マルクスは、価値形態論は弁証法が一段と鋭くなっているといい、ヘーゲルを読み直してヘーゲル弁証法が頭で立っているということ価値形態の分析で証明したのだ。だからヘーゲル弁証法の転倒が必要だと述べたのだ。私はこのマルクスの言葉については『価値形態・物象化・物神性』を書いた時にはわからず、その後のヘーゲル研究で、ヘーゲル弁証

法の転倒とは、対象と自我およびその関係である意識の三つを措定した時に、ヘーゲルは意識を主体とし、この見地から弁証法を展開したのがヘーゲルの論理学である。ではその転倒とはどのようにしてなしとげられるのかといえば、対象と自我という、意識にとっては外部のものを主体とすればいい。これが私の解明した「外の主体の弁証法」である。

<http://www.office-ebara.org/modules/xfsection05/> で掲載されている諸論文参照。

この転倒された弁証法からマルクスは価値形態を分析し、相対的価値形態にある商品 A と等価形態にある商品 B との関係において、ヘーゲルなら価値を主体とするところを、商品 A および B を主体として、その関係の論理を展開したのだ。そのことによって等価形態にある商品が価値の化身となっているという関係における形態規定および、関係の中での相互の抽象化の仕組みを解明したのである。分析的抽象とは異なって関係の解明には、関係の両極を主体とし、関係によってつまりは総合によって抽象がなされ、その関係の中では自然物が形態規定されて、社会的なもの化身とされるのである。この事態は商品の価値形態に固有のものではなく、関係一般に適用できる弁証法であり、わざわざ商品語という〈場〉をつくる必要はない。しかもマルクスの価値形態論を、マルクスによる商品語の翻訳とすることで、マルクスが解明した転倒された弁証法の理解を成し遂げるといふ大事な事柄を見落とすことになる。なお、反証の弁証法については、『ASSB』第 2 巻 5 号（1995 年 2 月）所収「間主体態の論理（1）」があることに気づいた。この論文はなぜか HP にも未掲載だった。それで以下に復刻したものを資料としてつけておく。なお、『ASSB』誌は第 3 巻までは同人誌であり、著者たちもペンネームで書いていた。

ところで著者たちの簡単な価値形態の、とりわけ「第 v 節〈自然的規定性の抽象化〉過程に関して」は私が事態抽象として「間主体態の論理」で述べている事柄を言いかえたのだろうが、マルクスの分析を、商品語の翻訳ととらえているために、マルクスの叙述を単に繰り返しているようだがどこかおかしい。いちいち指摘する労も取る気がしないようなものだが、要するに著者たちの問題関心は、「このようなまったく奇妙な論理的転倒が、資本主義的生産様式が支配する社会においては、現実が生じているのだ。」（『マルクスと商品語』、159 頁）という理解であり、「つまりこの社会では、類的存在としての人間の社会性が、商品—商品関係に現れる転倒した社会性としてしか、存在の様態をとりえないのである。」（同書、160 頁）ということの確認に終わっているのだ。なぜこのような転倒が価値形態ではみられるのかということについての分析がいっさい放棄されている。

しかも、マルクスの分析は、価値という超感性的な現象形態の分析であり、マルクスが記述している転倒自体が人々に認識されているわけではない。つまりは超感性的な現象形態が人々の目に与える幻影的形態だけが認識されるのだ。著者たちは転倒という認識を、マルクスによる商品語の翻訳と見ることでそれがそのまま認識されると錯誤してしまっているのだ。

井上康・崎山政毅『マルクスと商品語』の薦め

——信用論研究会時代の回想——

はじめに

商品の価値形態に関するマルクスの分析は、商品語の翻訳である、という極めてセンセーショナルな論点を掲げた書籍が登場した。井上康・崎山政毅『マルクスと商品語』（社会評論社、2017 年）がそれだ。昨年は『資本論』刊行 150 年であり、今年にはマルクス生誕 200 年ということで、マルクスに関する著作もどんどん刊行されている。単に節目の年ということだけでなく、資本主義の行き詰まりが万人の認識になりつつある今日、変革の指針を求めて、マルクスの初読や再読がなされる時代にはいつて来たのであろう。であるならば、社会変革との関連で『資本論』を捉えかえすことが問われている。

援軍だと判明

数年前にこの書のもとになっている紀要『立命館文学』の抜き刷りをもらっていたので、目を通して見たところ、『資本論の復権』は文献として挙げられてはいたが、肝心の『価値形態・物象化・物神性』はスポイルされていたので不快感をもっていた。単行本にするという話を聞いたので昨年夏にこの件について問い合わせたところ、著書ではコメントしているということだった。

昨年 11 月に著書が発行された後にも色々行き違いがあり、やっと昨年末に本が送られてきたが、目次で『価値形態・物象化・物神性』への批判があることを確認した後、そのまま封印していた。ところが 1 月 27 日のルネサンス研究所関西の公開講座の準備のためにもたれた 19 日の事務局会議のあとの飲み会で、『マルクスと商品語』の話題で大いに盛り上がったのだ。私は未読であったので、50 代の事務局員たちが「榎原さんの言っていたことがやっとわかった」とか「人格の物象化は概念として成立しないのでは」とか言われて結局『価値形態・物象化・物神性』の内容をめぐる議論となったのだ。

それで私も封印を解く気になり、ぼちぼち読み始めた。1 月 27 日のルネサンス研究所の公開講座までには一応目を通しメモも作っていたが、28 日に開かれたルネサンス研究所東西合同運営委員会の後の昼食にまた『マルクスの商品語』が話題となった。

ここから判明したことは、ルネサンス研究所で 7 年間活動を共にしてきた『価値形態・物象化・物神性』を持っている 50 代の活動家ですら、これまで内容が充分理解されていなかったのであり、まして一般にはほとんど理解はされていなかった、ということだ。そして『マルクスの商品語』を読んだことで、この書の下敷きにされている『価値形態・物象化・物神性』の問題意識への理解が進み、価値形態論解明の今日的意義について納得するとともに、議論によってより理解を深めようという気分が生まれてきているのだ。この意味で『マルクスと商品語』は私にとってはまさに援軍なのだ。

ついでに言っておけば、岩波新書から熊野純彦が『マルクス資本論の哲学』を出しているが、これは『資本論』初版の価値形態論はスルーしている。初版の翻訳がブームとなり、いくつかの訳本が出ているにもかかわらず、どうやら学界の哲学者にとっては、初版本文価値形態論は哲学とはみなし難いようだ。

佐々木隆治『マルクスの物象化論』の書評より

佐々木隆治の『マルクスの物象化論』（社会評論社、2011 年）が出版されたとき、私は書評めいたものを書いたが、佐々木が拙著『価値形態・物象化・物神性』は未読であると判断して、その中に拙著の要約を組み込んだ。それは置いておいて、私はコメントの冒頭で次のように書いた。

「1. 解釈自体の問題性を問う

佐々木は自らの著書を世に問うことの意義について次のように述べている。

『物象化論の『実践的・批判的』意義を明らかにする試みは依然として充分になされていないのである。……物象化論、疎外論、所有論についてのより正確で、明確な解釈を示すこと、これが第二の目的である。』（『マルクスの物象化論』、117～8 頁）

見られるように、佐々木がめざしているのは第一に、物象化論の『実践的・批判的意義』の解明であり、第二に、物象化論等々についてより正確で明確な解釈を示すことである。この二つの目的に対して佐々木はそれなりの成果を上げていると見ていいだろう。しかし、その成果自身の内容が問題であり、その検証を試みることでマルクスについて論じる際の課題について示すことにしたい。

先走って言えば、佐々木は物象化論を『解釈』しようとしており、この方法自体がマルクスの問題提起を捉えそこなう原因になっている。『資本論』は解釈の対象ではなくて、実践に活かす理論をわがものとする営みにとっての対象である。私は 20 年以上も昔の自著におけるマルクスの物象化論把握と、佐々木が現在展開している物象化論解釈とを比較対照しつつ、マルクスとの付き合い方について読者に考えてもらうことにしたい。（『ASSB』

21 卷 4 号、2013 年、14 頁)

http://www.office-ebara.org/modules/weblog/details.php?blog_id=223

(なお、紙媒体の読者は、HP オフィス榎原で「佐々木隆治」で検索してください)

こういう批判は批判された側にとっては納得できないであろうが、しかしやはり重要である。それで、私の 1960 年安保闘争敗北後の理論的研究に対する問題意識を明らかにしておこう。私の問題意識は、安保闘争の敗北の原因というよりも、もっとさかのぼって、1917 年ロシア革命で端緒が切り開かれたヨーロッパ革命がなぜ敗北を余儀なくされたか、ということの解明だった。そしてもうひとつはソ連がなぜ変質したか、ということの研究だった。安保闘争後は、まずはシュトルムタール『ヨーロッパ労働運動の悲劇』(岩波書店、一九五八年)に依拠して、労働者の労働力商品所有者意識と対抗できなかったことを敗北の原因と考え、この見地から、労働力の商品化の廃絶を唱えながらも、価値や商品の規定に関するブルジョア的な見地に彩られている宇野経済学批判に向かったのだった。『資本論の復権』はその作業の成果である。

この辺の事情は拙著『資本論の核心』第 10 章第 2 節に書いたので、ここではマルクスからの引用を中心に論点を提示しておこう。

労働者が労働力を商品として資本家に売るのは労働市場でのことであり、労働力を売った労働者は工場で労働し、資本家に剰余労働を奪われる。これが搾取であって、搾取に抵抗する運動は労働組合運動として自然発生的に起きてくる。ここまでは誰でも理解しているが、しかし問題はその先にあり、資本の蓄積過程を考察すると、労働者は過去の不払い労働である資本によって働かされていることになり、労働力の売買の際の、自由で平等な商品交換者同士の取引という建前は、階級と階級とのあいだの不平等な取引という現実を覆い隠すイデオロギーとなる。この取得法則の転変に注目して宇野理論を批判した。

取得法則転変についてのマルクスの記述を引用しておこう。

「明らかに、商品生産および商品流通にもとづく取得法則または私的所有法則が、それ独自の・内的な・不可避的な・弁証法によって、その正反対物に転変する。本源的操作として現れた等価物どうしの交換が、一変して、仮象的にのみ交換されるようになる。けだし、労働力と交換された資本部分そのものは、第一には、等価なしに取得された他人の労働生産物の一部分にすぎぬのであり、第二には、その生産者たる労働者によって補填されねばならぬばかりでなく、新たな剰余をともなつて補填されねばならぬからである。つまり、資本家と労働者の交換関係は、流過程に属する仮象にすぎぬもの、内容そのものとは無縁であつて内容を神秘化するにすぎない単なる形式、となる。労働力のたえざる売買は形式である。その内容は、資本家が、たえず等価なしに取得するすでに対象化された他人の労働の一部分を、より多量の生きた他人の労働とたえず再び転態するということである。……所有はいまや、資本家のがわでは他人の不払労働またはその生産物を取得する権利として、労働者のがわでは自分じしんの生産物を取得することの不可能性として、現象する。所有と労働の分離が、外観的にはそれらの同一性から生じた一法則の必然的結果となる。」(長谷部訳第 1 巻、461 頁、新書版 4、1000~1 頁)

この作業と同時並行して私は論文「国際共産主義運動の歴史的教訓」を雑誌『序章』に連載し、革命運動の敗北の原因を探っていたが、そこで発見したものが、第一インターナショナル一般規約の中にある、労働者の「経済的隷属」という規定であつた。

「労働用具すなわち生活源泉の独占者への働く人の経済的隷従が、あらゆる形の隷属、あらゆる社会的悲惨、精神的退化、政治的従属の根底にあること。それゆえに、労働者の経済的解放が大目的であつて、あらゆる政治運動は手段としてこの目的に従属すべきものであること。」(『マルクス・エンゲルス全集』、第 16 巻、大月書店、12 頁)

先にあげた組合運動の自然発生性に対比して、経済的隷属からの解放は目的意識的に取り組まれなければならない課題である。そして政治は目的ではなくて手段であるという把握が重要である。

1971 年に指名手配され、1976 年 10 月に逮捕されるが奇しくも、中国文化革命を主導し

た四人組の拘束と時期を同じくしていた。それはさておいて、獄中でソ連論の研究を開始し、主としてソ連における商品生産論の批判的検討をまとめて『ソビエト経済学批判』（四季書房、1982年）を出版してもらい、引き続き機関紙『赤報』に「ソ連における階級の形成」を連載した。その成り行きで、それまではよくわからなかった価値形態論の研究に取り組み、『資本論』初本文価値形態論の意義を始めて理解し、『ソビエト経済学批判』第4章第2節に掲載した。この論文が私の最初の初本文価値形態論の解説だった。

（機関紙『赤報』や『共産主義』は「リベレーション社」のサイトでPDFファイル化されている。アクセスは次：<http://www.geocities.jp/liberationsya/rg.html>）

80年代後半の信用論研究会での出会い

私が83年10月に出獄した時に、私を迎えてくれたのは、京大出版会で、卒業者名簿を編纂していた八木俊樹（故人）、白樺のマスター高瀬泰司（故人）、そして表三郎だった。

駿台予備校教諭の表三郎は、予備校生に社会教育をし、大学入学後に自ら主宰する研究会に参加させて、毎年学生を活動家に育てていた。表三郎は、加藤正を評価し、井上康は加藤正著作集の編集をしていた。（『加藤正著作集』全三巻、刊行委員会発行）

八木俊樹は雑誌『序章』の編集者で、私が地下潜航中（71年から76年10月まで）宇野経済学批判の原稿などを寄稿するように勧めてくれ、また拘置所に在監中に『資本論の復権』を編集し、表三郎の資金的協力で出版してくれていた。

こういう事情ですぐに表三郎、八木俊樹、私の中で研究会を組織することになり、信用論研究会が発足した。表はそのころ商品語の問題が大事だといっており、八木は資本の悪だけでなく商品の悪をあばく必要性を訴えていた。私は信用論に興味が移っており、信用商品論をメモにして提起した（手書きのレジュメには、信用商品とは、信用が一般商品にこびりついたものという発想が記されている）。この三名の協力による研究ワールドに、井上康や崎山政毅も参加していた。井上はこの頃の表の問題意識を発展させて『マルクスと商品語』にまとめ上げたのではなかろうかと想像している。

ところで井上は八木の雑誌寄稿論文だけではなく、ノートの類も収集整理して『逆説の対位法——八木俊樹全文集』（2002年、八木俊樹全文集刊行委員会、領価2万円）、を出版している。それに『資本論の復権』の書評が収められている。初出は八木が発行した新たらしい個人雑誌『LA SUR-FORME』（第一号、1978年9月）である。この小冊子の冒頭には「不可視の党の無（プラズマ）と量子商品」という短文が掲載されていて拙著の書評はそのあとに収録されている。石川九揚のデザインだと思われるおしゃれな体裁の小冊子は、本文17頁で継続しては刊行されなかった。なお、「形式的編集者」として井上康が発行人となっている。

書評は「労働価値説に於ける先験性誤謬に戯曲作法」と題する論文で『資本論の復権』を次のように評価している。（旧字体が使われ、又ルビがふった漢字が多数あるが、それを再現してはいない。ルビについて必要と思ったところはカッコに入れてある）

「所で、すでに述べた處だが、此の文書は、余人にとって宇野経済学の度し難い程の批判的批判に沈つてゐやうと、學術風の実証臭をしてゐやうと、経済学批判としての『資本論』と同じ様に、先験的誤謬を遠近し暗穴（ブラックホール）に追い込んだ政治的文書である。無論、政治的文書と言っても、それを直接主題としたわけではないから、此の文書の紆余曲折を辿って解説しその政治性を引き出すわけにはいかないが、又、此の文書の政治性は自己の党派性の一応の解釈を提供した所にあるのでもないが、然るに、吾々は偏に、此の文書の河床を流れる音楽から一の極度に抽象的の旋律が——私は、不可視の党の旋律だと言ひ度いが——ゆらめく様に鳴り響くのを聞き分けねばならぬ。若し望むなら、『資本論』解釈史上の一段階を画する此の文書が、暗穴といふ元来の非合法の領域の政治性を経済学に最初に感光したと言っても強ち過言ではなからうか、此れが亦、レーニンの、裁然と区別された組合主義的政治と社会民主主義的政治といふ力学から出来た党組織論を彼らが追及して止まなかつた所以でもある。」（『逆説の対位法——八木俊樹全文集』、597頁）

少し褒めすぎであろうが、「非合法の領域の政治性を経済学に最初に感光した」という観点は、埴谷雄高が、それを文学に感光させたと思っていた私にとっては嬉しい評価だった。少し補足するならば、不可視の党とは非合法党のことであり、レーニンの『何をなすべきか』や「一同志に与える手紙」（レーニン全集第6巻所収）にもとづいて、それまで合法的党であった第二次ブントの党を、RGと名付けた軍を組織しうる非合法党として「党の革命」をめざしていた私たちのことを念頭に置いて書かれている。当時は、ソ連でのスターリン主義の台頭とその組織論にされたコミンテルン第3回大会組織テーゼ（このテーゼは今日の党派の組織論のモデルとなっている）からは決別し、ロシア革命以前のボリシェヴィキの非合法党の組織論を復権しようとしていたという事情があった。

八木俊樹の量子商品論

さて、商品は悪だということを主張しようという八木俊樹の「量子商品論」がこの書評で述べられているので、せっかくだから紹介しておこう。最初に読んだときには理解不能であったが、今読み直すと何となく言いたいことがわかるような気がする。

「量子商品——これは、私の眼に映じた商品のスペクトルを私の網膜剥離症が焦点したところの奇妙な姿を率直にさう呼んだまでの事で、比喻や修辭の積りではないが、又当然乍ら、現代商品の定義や定理一般の積りではない、いわば感覚命題であると言っても、少しも差支へないわけだが、併し、さう言うと又、商品のレアリズム解釈が通俗化してつた現代人が直ぐ誤解してふところであるが、現代資本主義の構造が排泄する商品の色調と色彩との感覺的比喻と考へられようから、少し許り弁明を要するが、それは、現代資本の構造と表情の統一された商品といふ原基形態の姿態が量子商品である。」（同書、600～601頁）

いま引用した所は小冊子『LA SUR-FORME』に掲載されている冒頭論文「不可視の党の無（プラズマ）と量子商品」という短文を受けて書かれているので、短文から量子商品の定義のようなところを引用しておこう。

「凡そ商品といふものが、言ひ代へるなら、微分値たる価値粒子と積分値たる資本の無概念的の無政府との統一としての素朴な或は密教的な唯物汎神の実体といふものが、世界市場の相對論的文法（場）に交響された挙句商品量子に終末した今、粒子と波動との量子商品の二重性が資本の生産機構の中樞神経を手術し弁証する時、かかる時、一体如何なる神経病理の症状が陳列されるのか。——資本の量子商品の發明に伴ふ悲喜劇を、この世の商品と労働力商品といふものは、恐らく非常な鮮やかさで演じてゐる。」（同書、584頁）

八木は量子力学のプラズマ状態を現在の世界市場に見ている。プラズマとは、個体・液体・気体に続く物質の第4の状態であり、宇宙にあつては質量の99%がプラズマの状態にあるとみられている。だから、量子商品とは地球上にありながら宇宙における物質の存在様式のごときものだという把握なのだ。このような観点から、後続する拙著の書評で述べている事柄を概括的にスケッチしているのだが、理解に困難である。この短文を去って書評の方に移ろう。

「然るに、敵の極限值と自己組織の極限值とのレーニンの対応原理が、澁澗たる現世の権力に不能を宣言されて以来、吾々は資本制の構造とその性の磁場との分裂と統一の二重性に追放されたのであろうし、かかる構造と表情との二重性を商品といふ性の磁場に於いて統覚させられた形態が量子商品といふ物質（もの）に他ならぬのであつて、それ故、さうした量子商品が労働価値説の先驗的誤謬の誤謬性と真理性との弁証を、如何様に現代的に劇し反・劇してゐるかといふ事が、さしあたりの主題である。」（同書、601頁）

ヨーロッパ革命の敗北をどうとらえ、新しい革命理論をどう打ち立てるか、という問題意識は共有されている。雑誌『序章』に連載された私の論文「國際共產主義運動の歴史的教訓」も編集者として読んでいた。八木は革命の敗北の原因を商品の量子商品化と捉えたのだ。私自身は、『ソビエト経済学批判』での廣松説の検討を転機に、物象化論を商品による意志支配の様式として解明していくが、当時は八木の量子商品論の提起を資本の商品化

の問題として捉え、「信用商品」という範疇を立てようと考えていた。現在提起している負債資本、負債経済の解明は、この思考の延長にあった。

寡黙な八木が、「商品は悪だと証明すべき」という趣旨の発言をしていたのは、商品の量子的ふるまいの批判の必要性ということだった。私はその解を、『資本論』初本文価値形態論と交換過程論を研究し、価値形態論の第IV形態が貨幣形態ではなく、交換過程論で貨幣が生成されるという論理構造になっていることに気づいて、物象による意志支配であると解いた。

「商品といふものの内部圧と外部圧との均衡が果てしなく混乱してゐるのは、現代人には見易い事だ。ためらはずに言へば、吾々の労働と生活が商品の意味構造の内から次第に食み出したのであらうが、為に、逆説的に、量子商品の治世に完璧に宰領されてゐる、資本の統一場の一量子として捕へられてゐる、といふ事だ。頗る唐突だが、宇宙方程式の現代的解——生活の不定（ニヒル）と革命の不能（アナーキー）——といふ仮説を支へてゐるものは、かかる量子商品の呼吸法であり、これが亦、色調と無調に関する現代資本の独特の明暗法を律格し伴ふ、創造と退廃（デカダンス）との戻率の奇妙さを吾々の神経組織の中樞に手術して、一種怪しい感興さへ覚えさせる。嘗て市場の対象にすぎなかつたものは、今や物神産業といふ生産の対象であり、凡ゆる産業の体温と脈拍となって物神の異常な速度に拍車をかけてゐる。」（同書、601頁）

商品の量子商品化が現代世界をどう変えたか、という記述がここにある。「生活の不定（ニヒル）と革命の不能（アナーキー）」ということに集約されるが、量子商品の呼吸法に由来するこのような現状の分析のためには、商品が市場で売買されているものとしてではなく、「粒子と波動との量子商品の二重性が資本の生産機構の中樞神経を手術し弁証する」量子商品と化し、「今や物神産業といふ生産の対象であり、凡ゆる産業の体温と脈拍となって物神の異常な速度に拍車をかけてゐる。」ことを理解しなければならないのだ。この理解の上にはじめて、「無（プラズマ）の政治学」が開けてくる。

「若し、労働者といふものを、労働の先験的誤謬の真理性的電磁場と、資本の生産と蓄積の重力場との干渉の統一場といふ完璧に仮象された舞台の抽象の劇（ドラマ）であり、又、かかる超巨星宇宙に接続する反宇宙の反・劇という抽象の抽象（非抽象）とするなら、さうした粒子的波動の造形と波動的粒子の状態の統一は、労働組合主義と唯物弁証の凡ゆる力学を剥がれた、無・形式（プラズマフォルム）の超力学と超文体との政治性を受け取るに違ひない。言ふまでもなくこれが、『資本論』といふ政治文書の量子論的解釈に他ならぬが、為に、吾々は差し当たって、暗穴（ブラックホール）と党の形式の抽象性を高次の不定形（アモルフ）に叩き込んでみかねばならぬであらう。かかる時だ、労働価値説の先験性と、存在と思惟の凡ゆる先天範疇を薄明と化し崩壊させる、現代資本の性的電磁波たる量子商品の、この薄明の力学が、暗穴（ブラックホール）の——言ひ代へるなら労働価値説といういふ先験的誤謬の誤謬性の——状態関数の室内楽（ニヒリズム）を旋律するのだ。かかる時だ、不可視の党の野心的な抽象の王国が、さういう状態関数を状態関数と和声し交響し一の超越方程式を造形するのだ。——だが然し、だが——かかる超方程式が、前に述べた、吾々の革命の不能と生活の不定を解とする宇宙方程式と、一体、何処がどう違ふのか、という疑問の中に、量子商品といふ現代の悲喜劇があるのかもしれない。」（602～3頁）

この記述を私なりに理解すれば、プラズマの政治とは、個体・液体・基体という物質の三体を越えたところに構想されるべき政治であり、それは関係に注目した政治ということになる。この新しい政治の基礎には量子商品があるのだが、量子商品とは、価値形態を価値関係として見ることで分析対象として措定できることになる。量子力学は物質の関係に関する科学であり、それもミクロの世界の分析であった。量子商品論とは、価値関係の中で起きている事態の解明から始まり、そしてその量子商品の廃絶という大きな物語を紡ぎ出すものが、プラズマの政治であろう。とするならば、これは文化知や、革命後の政治とつながってこよう。

- 『逆説の対位法——八木俊樹全文集』(A5版、1280頁、定価2万円)の入手方法
下記振込先に、書名を記載の上、2万円を送ってください。
振込先(郵便振替) 口座番号：01090-5-67283 口座名：資本論研究会
他金融機関からの振り込み 店名：109 当座 0067283

私の価値形態論にかかわる研究歴

最初の書『資本論の復権』(1978年、鹿砦社)では第5章で宇野久留間論争を取り上げているが、初版本文の検討は避けていた。避けた理由について、生意気にも「(初版は)『資本論』を論理学として考察する見地から取り上げた方が生産的だからである。」(『資本論の復権』、338頁)と述べているが、一読して理解できなかったというのが本当のところである。

次の著書は『ソビエト経済学批判』(1982年、四季書房)であるが、私は在監中にソ連の研究をしていた。ソ連の学会での論争点の一つが、ソ連における商品生産の存在をどのように理解するかという問題だった。手始めにソ連の経済学教科書の批判から始めているうちに、商品論をめぐるソ連の論争の整理をする羽目になり、機関紙『赤報』に公表した論文やノートをまとめて一書に仕立て上げたのだが、その最終局面で編集してくれていた八木から、廣松渉の『資本論』理解へのコメントがほしいというので、第4章価値形態と商品の物神性、を加え、第1節で廣松説の検討をし、第2節で『資本論』初版の価値形態論について論じた。

これは私にとって初めての初版本文価値形態論の研究で、私は初版本文、付録、現行版の分析視角の相違に注目して論点を整理している。そしてこの研究を経て、『資本論』を物象化論として読むことについて、廣松流ではない形での読みがあると考えようになり、後の『価値形態・物象化・物神性』(1990年、資本論研究会)での独自の物象化論提起に至るのである。

なお、『資本論の核心』(2014年、情況新書)に収録されている第2~6章は、『価値形態・物象化・物神性』の原稿が出来上がっていた時期に、カセットテープで「資本論講義」を作成して販売したが、そのときの録音の文字起こしに手を入れたもので、私の初版本文価値形態論についての最新のものである。

(資料1) 復刻版：間主体態の論理(1)

復刻にあたって

この論文は当然にもHPに掲載されていると考えていたが、未掲載だったのでここに復刻する。改行などの表現を変えてはいるが、内容に変更は加えていない。

なお、私はこの後、「哲学の旅」としてHPに掲載している諸研究に携わり、ヘーゲル弁証法の転倒について「外の主体の弁証法」と特徴づけることができたが、その萌芽はすでにこの論文に見られることを指摘しておきたい。(2018年2月21日)

間主体態の論理(1)

『ASSB』第2巻5号(1995年2月)所収

間主体態とは間主体性とか間主観性とか訳されている。フッサールが提起して以降、現象学の主要テーマの一つである。これは個としての主体と主体との間の関係をどう捉えるか、という問題であり、現象学は今日に至るまでこの難問を解決できていない。

ところで脱物象化をめざした協同主体の形成を解明しようとする際、主体と主体との間の関係を捉える方法論を確立しておくことが必要となる。現象学の成果がたよりにならな

いとすればこの課題を解決するために役立つ理論が他にあるのだろうか。

このような問題意識で、とりあえずマルクスの関係論と反照の論理、及び形態規定の論理を再読することから始めよう。

第一章. 関係、反照、形態規定

(1) 関係とは何か

「諸関係というものは、総じて、それらが、たがいに関係しあっている諸主体から区別されて、確定されなければならないとされるばあいには、ただ思考されることができるだけだからだ。」(『資本論草稿集』4巻116頁)

マルクスは『経済学批判要綱』として戦後出版された研究ノートで、A、B二つの商品の交換関係を考察し、この関係で等しいものは、AでもBでもない第三者であり、この第三者はある一つの間接性を表現しているから頭の中の表象として存在している、と述べたあと、このように、関係それ自体は思考されることができるだけだ、と述べた。これはおそらく、関係として表現されるものが、抽象的なものであり、人間の感性では捉えられない超感覚的なものであるからなのだろう。

関係をたがいに関係しあっている諸主体をも含めて理解しようとするならば、それは一つの形態として存在している。従って、二つの商品が関係している、という経済的な関係の内容は、この経済的な形態を分析するところから導き出されねばならない。形態はおのずから内容を決めている。その経済的な形態のうち形態規定を発見すればよい。ところがそうしようとするならば、諸主体は関係の項となり、両極となってしまふ。ここではヘーゲルが磁力について述べている両極性の論理が働く。

「両極は、一本の實在的な線の感性的に現存する両端である。しかしこれらの極は、極としては、感性的な、力学的な實在性を持たず、観念的な實在性を持つ。これらの極は分離することが全く不可能である。」(ヘーゲル『エンチクロペディー』河出書房新社、253頁)

先にマルクスが、関係を両極から区別し、それ自体を確定しようとするならば、それは単に思考されるだけのものにしかならない、と述べていた。そこで、関係する諸主体をも含め、関係を一つの形態として想定し、形態規定を発見しようとするならば、今度はヘーゲルが、両極は感性的な實在性を持たない、と言う。

外的素材はなくとも論理を展開していく観念論とは違い、感性的に確かめうる外的素材を分析しようとする唯物論にとっての困難が現れる。二つの商品の経済的な関係について、関係そのものを分析しようとするならば抽象的となり、ついで両極を分析しようとするならばそこには観念的な實在性しかない、というのである。

(2) 反照の論理

では関係を把握するにはどうすればよいのか。関係の論理学はありうるのか。関係の論理学は反照(リフレクション、反省、反射とも訳される)の論理学であり、マルクスが明らかにした形態規定はヘーゲルの反照論を完成させたものであって、これこそが弁証法の核心をなしている。このことを明らかにしよう。

ヘーゲルは相互に独立したもの同士の間接性における反照の論理を次のように展開している。

「両者がそれぞれ自分は他者ではないという形で向自的にあるのだから、両者はそれぞれ他者の中で照り返しており、他者があるかぎりにおいてのみあるのである。したがって本質の区別は対立規定であり、これによれば、区別されたもの(両者)は決して他者一般を持つのではなくて、自分の他者を自分に対して持つのである。両者はそれぞれ自分の独

自の規定を他者への自分の関係の中のみ持つ、そしてそれが他者へと反照させられているときじつはただ自己へと反照しているにすぎない。そして、その他者もまたこれと同じことをしているのである。このように、両者はそれぞれ、他者固有の他者なのである。」(『エンチクロペディー』131頁)

ヘーゲルの論理学の本質論では反照の論理が駆使されて、本質が何であるかを展開していく。反照の論理は本質の展開過程で様々であるが、論理としてとりだすならば、ここに示したものとなる。

ヘーゲルにとっては、論理学で対象となっているものは思考である。従ってそれは直接的には外的対象にとっての論理ではない。とはいえヘーゲル論理学の特徴は、それが思考を対象としつつも、その概念を客観化するものと捉えているところにあった。従って、伝統的な論理学とちがひ、対象の論理をもそのうちに組み込んでいた。だから、対象に則して反照の論理を展開しようとするとき、ヘーゲルの論理には弱点が現れる。それは形態の規定をどう捉えるか、ということである。

ヘーゲルにとって本質的なものは関係であると捉えられてはいても、それは思考と思考との関係であった。従ってその反照にもとづき、現象が生成され、一つの形式が出現したとしても、それは本質の形態でしかありえなかった。ところが思考とは異なり、外的素材が関係を結ぶと形態が二重化してしまう。外的素材は新たな形態によって形態規定され、本来の自然的質の他に新たな質を持ってしまう。ヘーゲルに欠けているものはこの形態規定の論理である。

(3)形態規定の論理

商品A、例えばリンネルは使用価値である。これと商品B、例えば上着が関係させられ、1エレのリンネル=1着の上着、という経済的關係が成立しているとしよう。

リンネルは使用価値としては上着と異なっている。リンネルとも上着とも異なる第三者がこの関係をとりもっているのだが、それはただ思考されることができるだけである。マルクスは社会の中で成立している抽象的人間労働がこの第三者であることを発見し、それを価値の実体と規定したが、それ自体は思考産物でしかなかった。

ところが、リンネルと上着を両極とする価値関係を考えると、両極が反照しあうことによって、先の思考産物が実在的なものに転化される。このときヘーゲルは両極が観念的な実在物になることを心配していた。マルクスが発見した形態規定の論理は、ヘーゲルの心配を杞憂とした。

「リンネル価値の上着での表現は、上着そのものに一つの新しい形態を刻印する。・・・上着はいまやまったくそのありのままの姿で、上着というその自然形態において、他の商品との直接的交換可能性の形態を、一つの交換の可能な使用価値の・あるいは等価物の・形態を持つ。」(『マルクス経済学レキシコン』11巻、27頁)

二つの商品がとりもつ関係を表している形態が、それぞれに新しい質を与えることが形態規定の特徴である。両極にそれぞれ新しい質が与えられる、ということは、従来の質が観念的な実在物に転化されることを意味している。この点でヘーゲルの心配は当たっていた。しかし、両極が新しい質の形態として形態規定されていることを知れば、両極は二重物になった、ということであり、感性的な実在物が、超感性的な質を形態規定によって新たに獲得した、ということなのである。

反照の論理が形態規定の論理と結び付けられることによって始めて、外的素材同士の関係が解明しうる。双方を結びつけた例が、マルクスの商品論なのである。

「われわれはここで、価値形態の理解を妨げるすべての困難のかなめに立っているのである。商品の価値をその使用価値から区別すること、あるいは、使用価値を形成する労働を、単に人間的労働力の支出として商品価値で評価される限りでの同じ労働から区別することは、比較的たやすい。商品または労働を前の形態で考察するときには、あとの形態で

は考察しないし、あとの形態で考察するときには前の形態では考察しない。これらの抽象的な対立物はおのづからたがいに分かれるのであり、したがってまたたやすく見分けられるのである。商品の商品に対する関係の中にだけ存在する価値形態の場合はそうではない。使用価値あるいは商品体は、ここでは一つの新しい役割を演じるのである。それは商品価値の、つまりそれ自身の反対物の現象形態となる。同様に、使用価値に含まれている具体的有用的労働が、それ自身の反対物に、すなわち、抽象的人間的労働の単なる実現形態となる。商品の対立的な規定は、ここでは、互いに分かれるのではなくて、互いに反照しあうのである。これは一見するといかにも奇異に思われるが、立ち入って考察すれば必然的なものであることがわかる。商品は、もともと一つの二重物、すなわち使用価値及び価値、有用的労働の生産物及び抽象的な労働凝固体である。それ故商品は、自分が商品なのだということを表すためには、その形態を二重にしなければならない。使用価値の形態は、商品は生まれながらにもっている。それは商品の自然形態である。価値形態は、商品が他の諸商品との交わりにおいて始めて獲得するものである。だが、商品の価値形態は、それ自身がまた対象的な形態でなければならない。諸商品の唯一の対象的な形態は、その使用姿態、その自然形態である。ところで、一商品、例えばリンネルの自然形態はその価値形態の正反対物なのだが、それは、なにか他の自然形態を、他の一商品の自然形態を、自分の価値形態にしなければならない。それは、直接に自分自身にたいしてすることができないことを、直接に他の商品にたいして、したがってまた回り道をして自分自身にたいして、することができるのである。」(同、31～2頁)

商品の価値関係にあっては、等価値商品の使用価値が形態規定を受けて、別の質である抽象的人間労働の現象形態となること、このマルクスの発見を理解できている人々が何人いるだろうか。

(4)鏡の比喻

マルクスは二商品の価値形態に形態規定の論理を発見し、主としてヘーゲルによって展開された未完の反照の論理を仕上げた。等価値形態にある商品が、その自然的形態のまま、その反対物たる抽象的人間労働という社会的・一般的なものの現象形態になる、というこの論理を解明したところでマルクスは興味のある注をつけている。

「見ようによっては人間も商品と同じである。人間は鏡をもってこの世に生まれてくるのでもなければ、私は私である、というフィヒテ流の哲学者として生まれてくるのでもないから、人間は最初はまず他の人間の中に自分を映してみるのである。人間ペテロは、彼と同等なものとしての人間パウロに連関することによって、始めて人間としての自分自身に連関するのである。しかし、それとともに、またペテロにとっては、パウロの全体は、そのパウロ的な肉体のまま、人間という種族の現象形態として意義をもつのである。」(『資本論初版』、国民文庫、49頁)

ヘーゲルにこのことがわかっておれば、『精神現象学』の展開もずいぶん変わったものとなったであろう。もっともマルクスがここで用いている鏡の比喻についてはスミスが『道徳感情論』ですでに使っていた。

「もし、人間という被造物が、ある孤独な場所で、彼自身の種とのなんの交通もなしに成長して、成年に達することが可能であったとすれば、彼は、彼自身の顔の美醜について、考えることができないであろう。これらすべては、彼が容易に見ることができず、彼が自然に注視することがなく、それらにたいして彼が目を向けることができるようにする鏡を与えられていない、諸対象なのである。彼を社会のなかにつれてこよう。そうすれば彼は、ただちに、彼が前に欠如していた鏡を与えられる。それは、彼がともに生活する人々の、顔つきとふるまいの中におかれるのであって、その顔つきとふるまいは常に、彼らがいつ彼の諸感情の中に入り込むか、いつ彼の諸感情を否認するかを、表示するのである。そして、ここにおいてはじめて、彼自身の諸情念の適宜性と不適宜性、彼自身の精神の美醜を、

眺めるのである。」(筑摩書房版、181～2頁)

スミスもマルクスも同じことを述べているが、スミスは文字通り鏡の比喩としてしか展開できていないのに、マルクスの場合、ガラスの鏡とは異なる人鏡の論理を解明している。そうだから、この論理は、ヘーゲルの『精神現象学』の承認の論理をのりこえるものとなったのである。

(5) 弁証法の核心

弁証法とは何か、と言うと、エンゲルスがまとめた三つの法則があげられる。

「量から質への転化、またその逆の転化の法則、対立物の相互浸透の法則、否定の否定の法則。」(『自然の弁証法』1、国民文庫版、65頁)

ここには反照の論理も形態規定の論理もなく、従って関係の論理がない。しかし、関係の論理こそ、いまだに哲学者たちがつかみあぐねている当のものであり、ここにこそ弁証法の核心がある。

自然物が関係の項となることによって社会関係に入るとき、形態規定によって自然物が二重の質をもつ。問題は形態規定によって与えられる新たな質が何であるかを発見することであり、その抽象的なものがその関係の両極の反照によって抽象されていることをつきとめることにある。

そうだとすれば、両極の反照による抽象化、つまりは総合による抽象が弁証法の核心だ、ということにならないだろうか。このように捉えることによって、思考と存在とをつなぐかけ橋として弁証法を位置づけることが可能となるのである。

(資料2)『共産主義』21号掲載論文 C 物象化と階級闘争

(一) 価値形態と弁証法

E 君達は、よく、われわれの遺言を執行する、などと言っているが、今日はその手際を見届けにきたよ。

R そうですか。実は僕らも最近では討論する相手が少ないですから、ありがたいことです。

L では早速はじめたまえ。発言は手短かに、分かりやすく。

R 『資本論』初版、価値形態論をどう読むか、ということからはじめたいですね。

E おやおや、君達は僕の恥部の掘り起こしからはじめようというわけかい。仕方ないね。価値形態の俗流的理解の流布については、僕にも責任があるわけだから。

R 物象化と物化との区別という問題は前提にして、今回は価値形態の弁証法について話題にしたいですね。

L ほほう、君達は僕が『哲学ノート』で提起しておいた遺言を執行しようとするのかね。

E そういえば、イリイッチ(レーニン)の弁証法の理解では、僕も商品論がわかっていない人にはいるのだったね(注1)。

R そうですね。エンゲルスさんの場合、弁証法は主として発展法則という見地から問題にされていますが、レーニンさんはヘーゲルの論理学に当たってみて、それではまずいと考えたのでしたね。弁証法の核心が対立物の統一にある、というノートでの提起(注2)は、矛盾を構造的につかもうとしたのでしょね。

L こちらでヘーゲルと討論してみたのだが、どうもあの理解では、まだもう一つだったと反省しているんだ。

R それを聞いて大いに力づきます。実は僕らも、対立物の統一という見地からでは価値形態の弁証法は解けないのではないかと考えてきたのです。

M 価値形態の弁証法は、いうまでもなく、反照の弁証法さ。

(二) 反照の弁証法

E その反照の弁証法というやつは今もよくわからないのだよ。何度かヘーゲルに聞いてみたんだけどね。

R いま20エレのリンネルが一枚の上着に等しい、という簡単な価値形態を想定しますと、リンネルの価値が上着の使用価値で表されていること、つまり使用価値がその反対物である価値の現象形態となっていることが知られますが、この事態が反照ということでしょう。

M 僕の著作からの文字どおりの引用じゃあ困るね。

R そういわれると難しいのですが、例示を試みることにしましょう。あなたが上着の使用価値を価値鏡と見ている点がよくわからなかったのです。ついガラスの鏡を思い浮かべますが、それじゃダメなんですよ。

E 思想史からみれば、人間関係を鏡との比喻で論じるというのは、ヘーゲルの頃流行していたのさ。モール（マルクス）もスミスの『道徳感情論』は読んでいたね。

R ガラスの鏡だと、自分の姿が写し出されますが、価値鏡の場合、上着物質がリンネル価値の写像だ、ということでしょう。20エレのリンネルだと一枚の上着があらわれ、40エレのリンネルだと二枚の上着があらわれる、というように。

M フムフム。

E モールが言ってたように、価値表現は超感覚的だから、写像も、自分の顔が写るといふようにはならないのだね。

R こう考えると、上着が自らの使用価値で、リンネルの価値を照り返している、つまり使用価値が価値を反射している、ということがよくわかるのです。

M じゃあ価値の方は何を反照しているのかい。

R 使用価値が価値を反照するということはわかったのですが、価値が使用価値を反照するという方は、正直いって、もう一つはっきりしないのです。

M 君ね、僕が書いているところをもう一度読んでごらん。

R 初版20頁でしたね。そこにはこう書いてあります。

「使用価値あるいは商品体は、ここでは一つの新しい役割を演じるのである。それは商品価値の、つまりそれ自身の反対物の現象形態となる。同様に、使用価値に含まれている具体的有用労働が、それ自身の反対物に、すなわち、抽象的人間的労働の単なる実現形態となる。商品の対立的な二規定は、ここでは、互いに分かれるのではなくて、互いに反照しあうのである。」

あっそうか。使用価値が価値を反照しているということの裏に、価値が使用価値を反照するということがあるわけですね。

(三) 鏡の比喻と形態規定

E 反照の弁証法がむつかしいのは、例えば個人Aと個人Bとの間の関係（注3）とか、ヘーゲルの言う二つの自己意識の関係（注4）とかを想定するとすれば、そこで鏡の役割を果たす側が、この関係においては新たな形態規定を受け取る、ということなんだね。

M ヘーゲルは事実上形態規定を展開していながらも、自覚的にそうはしていないから、フレッド（エンゲルス）が反照の弁証法についてヘーゲルに聞いても不可解だと思うよ。

E そういえばヘーゲルは、実体＝主体だから、自己意識論においても相互承認がどうしても展開できなかったわけだ。モールなら、あそこで一方の自己意識Bの担い手が個人でありながら、対立している個人Aの自己意識を写し出す鏡の役割をはたし、この役割においては個人Bの身体そのものが類の単なる実現形態となっている、というのだろうね。

M 『精神の現象学』は、若い頃検討しただけだから、忘れてしまったよ。

R 話を『資本論』にもどしますと、上着が価値鏡となっていること、そこに反照の構造

がある、という理解でいいんでしょうね。

L ヘーゲル論理学との関連でいえば、本質論をひっくり返すということだな。

R 『大論理学』の本質論でヘーゲルは反照（反省あるいは反射とも訳される）を詳しく説いているのですが、あそこは難解ですね。

E ヘーゲル研究者であそこが理解できている人はいないさ。

M ヘーゲルは形態規定に純化してはいないから、形態規定で進んでいって論理が行き詰まったとき、実体＝主体ということ、つまりは内容にもどって論理を組み立てている、と考えれば、本質論の構造は見透かせるさ。

R そうすると、本質論での反照の弁証法をひっくり返す、という場合、弁証法の運動の契機を、ヘーゲルが逃げて内容に求めている点を批判して、あくまで形式に求める、ということになるのでしょうか。

L ぼくはいま、古いノートの本質論のところを読み返してみたが、あの時点で反照の弁証法を把握できていなかった、ということは明白だね。あの時はきっと、ヘーゲル流の非合理的な反照論に反発を感じていたのだと思う。それはさておき、ぼくは形式に純化するといったことで、転倒が可能になるとは考えないね。

R じゃあ、価値形態論のなかみに入っていきますよ。

（四） 価値形態の論理

R ぼくらは初版の価値形態論の意義は、簡単な価値形態の分析で、「それはそれ自身の価値存在を、さしあたりはまず、自分に等しいものとしての他の一つの商品、上着に連関することによって、示すのである」と述べている点にあると考えているのですが。

E ぼくは、あの手紙（注5）のことがあるから、とりあえずは発言をひかえるよ。

R つまり二〇エレのリンネル＝一枚の上着、という商品の価値形態において、この形態それ自体の意味する内容が、同じ質のものどうしの関係ということであり、この同じ質とは抽象的人間労働だ、ということがそこで表現されているということでしょう。

L ぼくも交換の歴史的過程の解明という問題意識で読むことが多かったから、価値形態の論理それ自体はつめて考えなかったね。

R こういうふうにと考えると、等価値形態に立たされている一枚の上着という使用価値自体が、新たな経済的形態規定を受け取っている、ということもよくわかると思うのです。

M 形態規定については宇野弘蔵君も強調していたようだが、君たちもそれに影響されたのかい。

R 彼の場合、あなたとは全然違う意味です。例えば、商品、貨幣、資本を「流通形態」として規定することが形態規定だ、というほどのことです。そうではなくて、上着の使用価値が、それとは別の本質の現象形態となっている、ということが、形態規定ということの意味でしょう。

E そういえば廣松渉君が、一そうそう、廣松君といえ、ぼくは彼には感謝しなければならないんだが（注6）一彼が最近やっている役割理論の取り込みなんかも形態規定と関係があるのかい。

R 廣松さんの場合、形態規定を純粹に取り出せなかったから、役割理論に興味を持つようになったのではないのでしょうか。

L 西部なんかは論外としても、六〇年第一次ブントの指導者だった人たちの最近の言動にはあきれることが多いね。

E そういう人たちだけでなく、最近の若手の社会科学研究者の書くものも無茶苦茶なのが多いよ。

M 無知が役に立ったためしはない、ということかい。

L 階級が成熟して資本物神が完成した、という君らの一連の判断についてぼくは保留しているが、しかし事態はその証明としての意義を持っているかも知れないね。

R ぼくらは、いわゆるインテリゲンチヤの知的生産物が、全く馬鹿馬鹿しいものになっ

てきている、というところにも、『資本論』の核心が、大衆的に理解される時代の到来を感じとっています。

L そういう弁証法はぼくも大好きだ。そうすると君らはモールが書いたあと、百年かかっても誰も解説できなかつた価値形態の論理を、大衆が理解する時代がきた、と見ているわけだね。

E ぼくの失敗が救済される時代がくるといふのかい。

R 話がそれたついでにいいますと、価値形態の論理自体は、例えば言語論や精神医学や心理学の流行というかたちで外化されているとぼくは考えています。ただしインテリゲンチヤの論説は、物象化にもとづく物象による人格の意志支配との対決をあいまいにしたところで、というより、その事実すら知らずに、たてられていますから、みな的是はずれです。こうした事態は、今日の労働者大衆の運動が、従来のような「戦闘性」を失ってきている（＝階級が成熟している）ことの反映でもあるでしょう。

しかし労働者大衆のなかに目覚めた人たちはいますし、彼らは物象による意志支配と対決せざるを得ませんから、価値形態の論理が眼に見えていると思うのです。

M 本当のところを言えば、物象による意志支配の様式の暴露が、あの本の核心さ。

（五） 観念論的転倒

R 価値形態の論理に戻りましょう。上着が新たな形態規定を受け取る、というとき、それは使用価値を作る労働が、価値の実体である抽象的人間労働の単なる実現形態となっている、ということでした。そしてこのようになることが反照の作用でしたね。

E 商品生産者たちの社会的関係を、労働の反照関係として解説しようと言うわけだね。

R そこででてくる問題が、価値形態の論理における観念論的転倒ですね。

L 諸物を考える場合、一般的なものは抽象の産物であって個物としては存在せず、諸物の総括としてあるだけなのに、価値形態では、個物としてある、つまり使用価値としてあるのは、価値という一般的なものが実在するための仮の姿となっている、という逆転のことだね。

E この転倒は貨幣で説明すると分かりやすい。貨幣にあつては一般的なものが金という個物として存在しているので、モールは動物なるものが、トラやウサギと同様の個物として生きているようなものだと言っていたけれど（注7）、日本でこの問題に気づいて注意を促したのは牧野紀之君でした（注8）。

R この商品、貨幣の観念論的存在構造が観念論の土台をなしている、ということはいわゆるあい認められるようになっていますが、ぼくらは物象による意志支配を考慮にいれなければならぬと考えています。

L そうだね。商品、貨幣の観念論的な存在構造に観念論の土台を見る、というのでは単なる反映論だ。これは自己批判だが、反映論を克服するにはやはり物象による意志支配を研究することが必要だね。ロシア語ではディング（物）もザッヘ（物象）も同じ言葉になるので、ぼくもはじめの頃は、物象化を物化と受けとめていたが。

R 物象による意志支配の問題はあとでやります。価値形態の論理における観念論的転倒は、価値表現の理解を難しくしている、ということですが、しかし他方で今日この論理が社会的意識となって大衆化していて、それがインテリゲンチヤによってロゴス中心主義批判（ポスト構造主義）などの諸説として氾濫させられているわけです。しかし、インテリゲンチヤと違って、大衆の場合、論理の転倒は生活そのものに根ざしたものですから、そこには価値形態の論理を把握しうる現実性が内在している、とぼくらは考えています。

E そういふ話を聞くと、ルカーチの階級意識を思い出してしまうが、その種の実践上の問題は体系化する必要はない、というのがぼくの忠告だよ。

L 政治的扇動として具体化したまえ。

（六） 価値形態と物象化

R ひきつづき価値形態の論理を見ていきます。

価値形態の秘密とは何か、という問題に移りますが、これは通常、使用価値で価値が表現されること、というように理解され、最善の解釈でも、使用価値上着が価値の単なる実現形態となっているということを確認することにとどまっているのですが、しかし、この上着が価値鏡となっているということが、相互に独立した私的諸労働の反照関係にもとづくことを理解しなければ、本当にその秘密を暴露したということにはならないとえます。

E 価値形態の秘密と謎との混同については武田信照君が指摘していたが（注9）、あれは面白かったよ。あそこを出発点にすれば、宇野・久留間論争の総括も可能となるね。

M 宇野君の場合は論外として、久留間君の場合、ぼくの著作の芸術的一体性ということを考えていないのは問題だよ。

L 第二章交換過程論は、ほとんど変更されてはいないので、初本文価値形態論との関連で研究されねばならないのに、宇野君も久留間君も現行版にもとづいて議論するという間のぬけたことをやらかしたわけだね。

M 先日宇野君と話したが、彼はやっぱり現象学に影響されたといっていたよ。

E 分析によって価値実体をとりだすのは誤りで、現象に則して叙述するべきだ、というかの発想だな。

R 価値形態の秘密が先に述べたことであるのに比べ、その謎というのは等価形態の謎性と関係しているとぼくらは考え、前者を物象化の原理、後者を物神性の秘密と理解したのですが。

L 物象化と物化の区別という問題は、政治理論の形成にとって重要だと思うね。ぼくは若い頃に物象化を物化と受け取り、経済過程を意識的行為とは考えなかったが、この点は『唯物論と経験批判論』を書かねばならなかったとき、哲学上の反映論の限界を突破できなかったことの根拠となっていたわけだ。しかしよく考えてみると、社会関係にあつては、無意識的行為も、実は意識に媒介されている。

E 経済過程は意識から独立しているのではなくて、意志から独立しているのだね。

M 社会関係における無意識的行為の分析は、ぼくが秘かに誇っているものさ。

E 通常、無意識についての理論はフロイトが創始者と見られているけどね。

R ぼくらは『資本論』の物象化論が、実は社会関係における無意識的行為の分析でもあることに最近やっと気づいたのです。

M 貨幣生成のところだね。

（七） 貨幣生成における社会的共同行為

R 初本文価値形態論には一般的価値形態のあと、第四形態がおかれています。これは全ての商品所有者が、自分の商品を一般的等価物にしようと考えている場合を念頭におけばよいと思うのですが、この第四形態では貨幣も成立しないし、その結果、商品も成立しないのです。

交換過程論では、この第四形態を受けて、商品所有者たちが当惑して考え込むところまで来て、そのあと「はじめに行為ありき」ということで、商品所有者たちの本能的な社会的共同行為による貨幣の生成が説かれています。

M もっと詳しく述べてみないかい。

R 相互に独立した私的諸労働の反照関係に商品所有者たちが順応して労働生産物の商品形態が生じているとき、この物象の社会的関係としての商品世界を分析することが価値形態論の課題であったわけですね。

そこでは商品があたかも人格のように意志と意識を持った主体としてあらわれて、諸商品が社会的に妥当な価値形態を作りだそうと努力するわけです。そして簡単な価値形態から出発して、一般的価値形態に到達し、諸商品が相互に価値としてあらわれることが出来る形態を見いだしたのですが、しかし、それは第四形態で否定されてしまうのですね。

つまり、物象の世界だけでは貨幣形態形成の必然性は明らかになっても、その現実性は

解けないのですね。そこで通常は、交換過程での商品交換によってその現実性が解けると理解されているのですが、そうではないのですね。現実性は商品交換にあるのではなくて、商品交換に際して、物象たる商品が商品所有者の意志と意識を支配して社会的共同行為をとらせること（物象の人格化）にあると見るべきでしょう。

M なるほど。その先はどうなるのかい。

R 貨幣は諸商品の交換過程の必然的な産物であるわけですが、貨幣が発生するのは、商品が交換過程に直面している商品所有者の意志を支配して共同行為をとらせることによってであって、交換行為そのものではないのですね。

このことがわかると、貨幣の発生は、商品所有者の社会的な共同行為を必要とする、といっても、この行為は無意識になされる本能的なものですから、当の商品所有者たちにとっては、貨幣は自然に自立的にあるように見える、ということもはっきりしてきます。

L その物象による意志支配論は面白いね。ぼくは政治の領域では大衆が社会構成体の運動に順応しているという事実をリアルに評価しておかねばならないと常々考えていて、そこで大衆蔑視だといった非難をあげせかけられることも多かったのだが、意志の自由が物象による意志支配をともなっていることがわかれば、この非難が当たらないことは明白だね。

E その貨幣の生成は、諸商品が相互に価値としてあられあうことが出来る、諸商品の社会的に妥当な形態の成立ということでもあるから、市民社会の成立ということでもある、ということになるね。そうなるとぼくの国家論、あれは気になっていたのだけれど、見直すことが可能になるなあ。

R あなたの国家論の総括についてはぜひ機会を改めてお聞きしたいと思います。

先に進みますと、この無意識のうちになされた社会的共同行為によって生成された貨幣という物象が、今度は貨幣蓄蔵の衝動をもつに到ります。貨幣は私的労働の産物でありながら、その私的労働が社会的労働の実現形態となっていて、社会的労働の化身です。

この社会的労働の化身を私物にすることが出来ますから、貨幣蓄蔵によって、より多くの社会的労働を支配しようという衝動がそこに生まれ、貨幣所有者の意志を支配します。

貨幣がもつこの致富衝動が、貨幣蓄蔵ではなく、資本の生産過程によって実現されるようになると、それは、資本の致富衝動へと発展します。この資本の致富衝動が資本家の意志と意識を支配して資本が人格化している社会、これが今日の資本主義社会ということでしたね。

M あの方は大分はしよったようだけど、大筋ではいいと思うね。

（八） 物象化と階級意識

R それで、資本における人格の物象化過程と物象の人格化過程については説明を省きまして、結論だけを述べましょう。

賃労働者が自らの労働力を可変資本に転化させられ、自らの人格的力を資本へと物象化させられます。他方、資本は資本家の意志と意識を支配して人格化します。

資本家による労働者に対する支配は、この物象の関係によって媒介されていますから、その支配は、労働者の労働力が資本に物象化されていることを根拠にして、労働者の意志を資本家が領有していることとしてあります。これが労働者の経済的服従ということなんです。

M ぼくは労働力の物象化とはっていない。

R そこは検討を要するとは思いますが、物象化のこのような捉え方からすれば、労働者階級の階級意識の形成の問題も、自覚の論理や、政治的民主主義の拡大や、自主管理（経済的民主主義）、といった従来の路線では行き詰まらざるを得ない、ということになると思います。

E 第二インターナショナルの失敗にぼくは責任をとらなければならないのだが、結局、モールが書いている、資本主義的生産が発展するにつれ、労働者の資本への経済的服従が

強まる、ということのをわれわれは本当にはわかっていなかったのだろうね。

カウッキーは資本主義が発展すれば危機が生じて社会主義が不可避となる、と考えていたし、ベルンシュタインは、この服従の強化過程を社会主義への道だと錯覚していたわけだ。もちろん、この服従の強化過程は、同時に労働組合の諸権利の拡大と労働者政党の発達の過程でもあったから、この錯覚の方は大衆化する余地があり、げんに修正主義の方が多数派となったわけだが。

L ぼくはコミンテルンの会合で『何をなすべきか』で提起した組織論は西欧では通用しない、としばしば述べたが、しかし物象化論をふまえれば、自然発生性と目的意識性についての提起は、むしろ新たに強調されねばならないと思うね。

R ぼくらはいま、最大限綱領の内容で大衆的な諸運動が形成されているし、それらの運動を発展させねばならないと考えています。

E モールが、『ゴータ綱領批判』に書いたのも、そのことに関連していたね。民主主義的要求を中心とした最小限綱領でしか大衆運動が組織できない、という発想が伝統化したことにはイリイチにも責任があるんじゃない。

L 『二つの戦術』は民主主義革命における共産主義者の任務を説いたもので、この理論は『四月テーゼ』で総括している。ただ後になって民主主義革命から社会主義革命へという二段階路線がコミンテルンで定式化されたのはネップの影響でしょうね。戦時共産主義の時期の急速な社会主義化の自己批判が、『四月テーゼ』の否定と『二つの戦術』の復権として、ネップ以降にスターリンらに受け取られたのであろう。

R そういえば、五〇年代には『四月テーゼ』は党内では禁書で、共産党の神話を打ち破ったブントは、『四月テーゼ』の復権だけで急成長したようなところがありました。

E 最大限綱領で大衆運動を組織する、ということはぼくらの念願だった。パリ・コミューンはすでにそうだった。その敗北は運動主体が最小限綱領しか意識できていなかったところにあったといえよう。

R 最大限綱領、つまり社会革命の要求で大衆運動が起きるなどとは信じられない、大衆運動の路線は徹底した民主主義の要求以外にはない、と考えている活動家が、いまでも結構多いのですが。

L そのような人々は、ぼくが徹底した民主主義の要求を、政治権力奪取後の運動の展望の問題として述べたことを忘れているのさ。社・共、いわゆる既成左翼は最小限綱領でしか大衆運動を提起しないが、その運動を左へ向けるために徹底した民主主義を対置しようというんだろうね。第四インターならともかく、ブントにもそんな発想があったのかい。

R 関西ブントの政治過程論というのがそうでした。しかしぼくらは六〇年代末にその克服を課題としてきました。いまから考えると、社会革命の要求で大衆運動を組織し、その運動でもって国家権力を打倒し、プロレタリアートの独裁を実現する、という路線の確立が、この課題への回答になると思います。

L 最大限綱領を要求する大衆運動は当然にも、最小限綱領を要求して闘われてきた従来の大衆運動とは、その展開も、発展法則も異なるだろうね。

R すでに時代はオルグの時代に入っている、というのがぼくらの認識です。全世界のいたるところから、一斉に社会革命の要求に基づく大衆運動が展開される前段階にある。

M・E・L われわれを扇動してもしょうがないよ。

(九) 社会革命の展望

E せっかくだから、君たちの社会革命の運動の展望を聞こうじゃないか。最大限綱領を要求して大衆運動を組織しようという意図はわかったが、しかしそれは具体的にはどんな要求になるのだろうか。

R とりあえず、商品、貨幣、資本、の廃止ということができます。

L そういう事柄では全然政治的扇動にはならないね。

R 階級の廃止ということの具体的内容として述べたつもりなのですが。

L 階級の廃止、というスローガンも、一般的すぎやしないかい。

R あるスローガンが適切かどうか、という問題を判定するためには、スローガンの方だけでなく、運動主体の方をも考慮する必要がありますでしょう。

L ウーム。ひょっとして、ぼくはまだ、最小限綱領を要求した旧来の大衆運動における運動主体を念頭においていたのかも知れない。

E かといって、ぼくにはどうしても、エコロジーとか反原発とか、自然食のための共同購入だとか、プロレタリア階級による組織的闘争だとは考えられないのだよ。あれはアナキストの運動さ。モールはどう思う。

M ねえフレッド、ぼくらが一八四八年にプロレタリアートの階級闘争だと述べた当時の闘争の主要な担い手がプロレタリアートではなかったことを、良知力さんたちが明らかにしたのを知っているだろう。要は闘争の担い手の問題ではなくて、闘争の理念の問題さ。

E アナキストに批判的なぼくとしては、君らの論議にもアナキズムのにおいを感じるね。

R 社会革命の要求で大衆運動を組織するというと、昔の活動家たちはすぐ、一体政治権力との闘争はどうなるんだ、といって反発するのですが、ぼくらは政治権力との直接的対決しか念頭にない人たちの方が、国家の破壊と自由連合を夢みたアナキストたちの轍を踏んでいると思います。政治権力を打倒するための闘争に決起するには迂回が必要だ、ということは、あなた方が、ヴィリッヒ・シャッパーたちを批判したときの見解じゃなかったですか。

E 政治権力との闘争を自己目的化したアナキストも居たが、他方ではコミュン作りに向かったアナキストも居たのさ。ぼくは今日の大衆運動は政治運動を否定している、という意味でアナキキーではないかと思っているさ。

R アナキストが運動に参加していたり、あるいは思想的なヘゲモニーをとっていたりすることを否定しませんが、しかしそのことと、大衆運動の性格がどうであるかということとは別問題でしょう。『哲学の貧困』には「社会運動は政治運動を拒否する、などと考えるはならない。同時に社会運動ではない政治運動などというものは、断じて存在しない」と述べられています。今日の大衆運動は政治的性格をもっていますが、それは旧来の最小限綱領主義の政治家の眼には政治とは見えない、ということではないでしょうか。

E じゃあ話を転ずるが、社会革命の要求を掲げて大衆運動を展開しようとする場合、ひと昔前の構造改革派のやったようなことになるのじゃないのかい。

R 構造改革派が目指したものは実際は民主化の実現でした。彼らにあっては民主主義とは社会主義への途にほかなりませんでしたから、民主主義的改良が即社会革命の土台として位置づけられていたのです。彼らが掲げていた諸要求は、商品、貨幣、資本、の廃止とは全く関連していなかったのです。

L 要するに君たちの主張では、商品、貨幣、資本、の廃止といったスローガンを抽象的、一般的なものとしてではなく、具体的な実践の指針として受けとめるような運動主体が登場してきている、ということかい。

R そうですね。ぼくらは今日の段階では、手ごたえを感じている、としか言いようがありませんが。

M それで価値形態の弁証法の謎とかが試みられているわけかい。

R ぼくらは今日の大衆運動は社会革命の要求に基づいているけれども、しかし自然発生的にそうなっているだけだ、と考えています。それは活動家たちが商品の価値を批判できずに使用価値の面からしか批判しないところにあらわれています。ところが使用価値は多様ですから、使用価値の面からの批判では運動は必然的に分散、対立せざるをえません。

L そうすると、今日の大衆運動の自然発生性と闘うための共産主義者の意識性は、とりあえずは価値の批判から始まる、というわけだね。

R 実際、今日の大衆運動は使用価値の面からの批判から出発しつつも、労働生産物を商品とする事によって、それを社会に通用するようにするシステム（商品経済）や、労働力

を資本へと物象化して、生産物を自らを支配する力として生産し、そうすることによって生産手段の所有者たる他人（資本家）に自分の意志を領有されるシステム（資本制的生産）はいやだ、という意識を強めてきています。

L つまりは市民社会批判ということだね。

R 階級の成熟という事態は、労働者階級が市民意識をもつ時代を到来させました。最小限綱領は、要はより完全な市民社会を要求するものですから、労働者が市民意識をもつに到った段階では、その種の要求をもとにした大衆運動が魅力を失っていくのは必然的でしょう。

E それは説得力があるね。

R ところが市民社会批判を掲げて大衆運動を提起しようという努力は、いままで政党の側からはなされていなかったのです。にもかかわらず大衆運動の側では市民社会批判が準備されつつあります。

L 一体どんなものかい。

R 例えば、市民社会の原理ともいうべきものは、個々人はエゴを追求する、社会全体はエゴが相殺されて均衡する、そこでなお残る問題は国家の行政にゆだねる、といったもので、これは社会的生産が資本家の私事として営まれ、競争によって社会的生産におけるバランスを保っているような社会にふさわしい意識形態でした。

ところがこうした市民意識にどっぷりつかって生活していったよいか、という反省が、大衆運動のエネルギーに転化してきているのです。

M それは大変なことだ。

マルクスが大声で何か言いかけたとき、目がさめた。真夏の夜の夢のなかでの対話はこれで終わってしまった。

注1 「ヘーゲルの論理学全体をよく研究せず理解しないではマルクスの資本論、とくにその第一章を完全に理解することはできない。したがって、マルクス主義者のうちだれひとり、半世紀もたつのに、マルクスを理解しなかった」。(『レーニン全集』三八巻、一五〇～一頁)

注2 前掲書、一九一頁。

注3 『資本論』河出書房新社版、五〇頁。

注4 『精神の現象学』岩波書店版、一八四頁。

注5 エンゲルス一八六七年六月一六日付手紙。

注6 廣松渉『エンゲルス論』盛田書店。

注7 『資本論』初版、原典二七頁。

注8 さしあたり『初版資本論第一章』鶏鳴出版、一八七頁。

注9 武田信照『価値形態と貨幣』梓出版、一九六頁。

(一九八九年四月)